松本市文化財調査報告 №65

松本市島立北栗遺跡Ⅲ

――県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書――

1988・3

松本市教育委員会

松本市島立北栗遺跡III

——県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書——

1988・3

松本市教育委員会

序

島立北栗地区は隣接する南栗地区とともに南栗・北栗遺跡、水田としての条里的遺構など、島立のなかでも遺跡の集中する一帯として知られておりました。昭和58年以来行われてきたほ場整備事業も徐々に整い当地における調査も5年目を迎え、前回同様緊急発掘調査を実施し記録保存を図る事となりました。

調査は松本地方事務所から松本市教育委員会に委託され、市教委職員を中心に地元考古学者、地区のみなさまの協力により11月27日から63年1月13日にわたり行われ、多大な成果をおさめ無事終了することができました。その結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居跡などが多数発見され、今までの調査結果もあわせてみると、北栗を含む島立地区一帯にかけて広範囲に拡がる古代の村のようすの一端をうかがう事ができました。折しも周辺では中央自動車道長野線建設工事も大規模に行われており、近い将来には地区の様相も一変してしまう時その歴史的記録をとどめておくことは私達に課せられた責務と考えております。又今回の成果と今後の周辺調査とにより一層の島立地区の歴史的解明がなされる事と信じております。

最後にこの調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました島立土地改良区をはじめ、島立公民館、地元のみなさまに心から感謝いたしまして序といたします。

昭和63年3月

松本市教育委員会

教育長　中　島　俊　彦

例　言

1．本書は昭和62年11月27日より昭和63年1月13日にかけて行われた松本市島立北栗遺跡の緊急発掘に関する報告書である。

2．本調査は県営ほ場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所より委託を受け松本市教育委員会が調査を行ったものである。

3．本書の執筆は第2章第2節を太田守夫、第3章第3節1を直井雅尚が担当し、その他の項目を関沢聡が行った。

4．本書の作成に関する作業分担は次のとおりである。

図整理：町田庄司・大木たかみ・土橋久子

遺構図トレース：町田庄司・土橋久子

遺物実測：岩野公子（土器）・関沢聡（石器・鉄器）

遺物トレース：岩野公子（土器）・赤羽包子（石器・鉄器）

5．本書の編集は事務局が行った。

6．出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

目　次

第１章　調査経過
第１節　事業の経緯と文書記録……1
第２節　調査体制……1
第３節　作業日誌……2
第２章　遺跡の環境
第１節　調査地の位置……5
第２節　地形と地質……5
第３節　周辺遺跡……8
第３章　調査結果
第１節　調査の概要……11
第２節　遺構
1　第１発掘面
1）　住居址……17
2）　竪穴状遺構……21
3）　建物址……25
4）　土壙・ピット……26
5）　溝……32
2　第２発掘面
1）　土壙・ピット……35
2）　溝……43
第３節　遺物
1　土器……44
2　石器・鉄器……49
第４章　調査のまとめ……50

挿　図　目　次

第１図　調査地の位置……4
第２図　地層断面図……7
第３図　周辺遺跡……9
第４図　調査の範囲……10
第５図　遺構配置図（第１発掘面）……12
第６図　遺構配置図（第２発掘面）……13
第７図　土層図……15
第８図　第１号住居址……18
第９図　第２号住居址……19
第10図　第３号住居址……20
第11図　竪穴状遺構……22
第12図　建物址１……23
第13図　建物址２……25
第14図　土壙　(1)……27
第15図　土壙　(2)……28
第16図　ピット　(1)……29
～
第18図　ピット　(3)……31
第19図　溝　(1)……32
第20図　溝　(2)……33
第21図　土壙・ピット群　(1)……36
～
第26図　土壙・ピット群　(6)……41
第27図　土壙・ピット群　(7)，土壙　(3)……42
第28図　溝　(3)……43
第29図　出土土器　(1)……47
第30図　出土土器　(2)……48
第31図　出土石器・鉄器……49

第1章　調査経過

第1節　事業の経緯と文書記録

昭和61年8月29日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

12月23日　昭和62年度補助事業計画書提出。

昭和62年4月28日　昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。

5月16日　昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

6月1日　昭和62年度県営ほ場整備事業島立地区北栗遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。

7月11日　昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

7月20日　昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

8月5日　昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

11月20日　北栗遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

昭和63年1月28日　北栗遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。

2月15日　北栗遺跡埋蔵物の文化財認定通知。

第2節　調査体制

調査団長：中島俊彦（教育長）　調査担当者：神沢昌二郎（市立考古博物館長）　現場担当者：関沢聡（市立考古博物館）　調査員：太田守夫、土橋久子

協力者：浅野房子、浅野八重子、岩野公子、大出六郎、大塚袈裟六、栗原清水、粂井まさ、粂井紀代子、粂井益子、小池直人、土橋久美子、鶴川登、中島新嗣、藤沢君江、松本かつ代、松森幸子、百瀬一子、百瀬縫代、吉江和美

事務局：浅輪幸市（社会教育課長）　小松晃（文化係長）　柳沢忠博（主査）　大村敏博（主査）　熊谷康治（主事）　直井雅尚（主事）　洞田睦子

第3節　作業日誌

11月27日（金）　曇り　　重機による表土剝ぎ。南側の低い水田（南区）の耕作土を除去する。北側の水田（北区）の耕作土の除去を開始する。

11月30日（月）　晴れ　　北側の水田の耕作土の除去（終了）。テントの設営を行う。

12月1日（火）　晴れ　　北区の検出を開始。検出面での遺構の覆土には3種類ある。1～3住、溝1・3、建物址1、土壙、ピット等を確認する。

12月2日（水）　曇り後晴れ　　北区の検出を継続する。溝2、4住、土壙、ピット等を確認する。

12月3日（木）　晴れ　　北区の検出を終了する。

12月4日（金）　晴れ　　1・2住、溝2・3の掘り下げ開始。ピットを半割。また、南区の検出を並行して行う。南区は耕作土の直下が礫を多量に含む黒褐色土（Ⅶ層）で遺構の検出が困難であるため、グリッド1～3を設定して土層を確認する。その結果、黒褐色土を重機で除去して暗黄灰色土層（Ⅸ層）で再び遺構を検出することにした。

12月5日（土）　曇り　　1・2住、溝2・3の掘り下げ（継続）。1住の床面で住居に伴うピット1～5を検出。溝1の掘り下げ開始。土壙1、ピットを半割。溝3の土層の断面観察から、土壙7の存在を確認する。

12月7日（月）　晴れ　　前日の降雪のため、発掘作業を中止する。

12月8日（火）　晴れ　　雪解けを待つため、発掘作業を中止する。

12月9日（水）　曇り後雨　　2住、溝1・3の掘り下げ。溝3掘り上げ。3住、土壙2～5、ピットの掘り下げ開始。午後から降雨のため、発掘作業は半日で終了。

12月10日（木）　曇り　　溝1掘り上げ。3住、土壙2～5掘り下げ（継続）。建1、溝4、ピット掘り下げ開始。測量のため発掘区内に3m毎に釘打ちを行い、糸配り図を作成する。

12月11日（金）　曇り　　建1、土壙6、ピット、溝4掘り上げ。

4住、ピット掘り下げ開始。写真撮影（溝1、2住セクション・出土状況、溝3セクション）。糸配り図の作成。

12月12日（土）　曇り　　竪穴状遺構1・2を検出する。竪1は土層図作成後、掘り上げ。4住、建1掘り下げ（継続）。写真撮影（1～3住、土壙2～5、溝2・3、建物址1）。本日は午前で発掘作業を終了する。

12月14日（月）　晴れ　　3住（竪3）、竪穴状遺構2の土層図作成、掘り上げ。土壙4～7、ピット1～5掘り上げ。溝1、2住ベルト外し。写真撮影（4住、ピット1～31）。南区を再び重機を使用して掘り下げる。

12月15日（火）　晴れ　　発掘区の東端で建物址2を検出する。ピット・溝4の土層図作成。写真撮影（ピット32～48）。南区は重機による掘り下げ終了。

12月16日（水）　曇り時々晴れ　　土壙7の土層図作成。ピット6～・溝4の掘り上げ。建物址2の掘り下げ開始。4住の床面で土壙が検出され、建物址1のものと判断する。これにより、建物址1は3間1間ではなく3間2間であることが判明した。また、4住の北辺に切られていたピット28も建物址1に属することが判明した。建1の西側2列の掘り上げ。1・2住の遺物を取り上げる。2住では区域外から土師器の破片が出土したので、北側へ発掘区を一部拡張する。平面図の作成を開始する。

12月17日（木）　曇り後晴れ　　建物址2の土層図作成。1住内ピットの土層図作成、掘り上げ。2住の区域外土器の取り上げ。

4住の床面で検出された建物址1のピット掘り上げ。写真撮影（溝1～3、土壙2～7、竪1・2、2～4住）。平面図の作成（継続）。

12月18日（金）　晴れ　　建物址2の掘り上げ。写真撮影（各遺構・全景）。発掘作業は午前で終了する。平面図の作成。

12月19日（土）　晴れ　　平面図の作成（終了）。この段階で、覆土の観察から4住を3住に、3住を竪穴状遺構3に変更する。

12月21日（月）　晴れ　　北区を重機を使用して南区の検出面と同じ高さまで掘り下げることにする。

12月22日（火）　晴れ　　重機による掘り下げ。検出を開始する。

12月23日（水）　晴れ　　検出終了。土壙・ピットの半割を開始する。土層図作成のため発掘区の北壁・西壁を垂直に削りおとす。

12月24日（木）　霧後晴れ　　土壙・ピットの半割（継続）。

12月25日（金）　晴れ　　土壙・ピットの半割（継続）。土壙・ピットの土層図の作成を開始する。測量のため、発掘区内に3ｍ毎に釘打ちを行う。

12月26日（土）　晴れ　　土壙・ピットの半割、土層図の作成（継続）。釘打ちの継続。遺構写真の撮影。

12月28日（月）　晴れ　　土壙・ピットの半割、土層図の作成（継続）。糸配り図の作成。発掘区の北壁・西壁の土層図を作成する。遺構写真の撮影。

12月29日（火）　晴れ　　西壁の土層図作成。

12月30日（水）　曇り　　糸配り図の作成（終了）。

1月8日（金）　晴れ　　土壙・ピットの半割、掘り上げ、土層図の作成（継続）。溝の土層図作成。全体図の作成を開始する。遺構写真の撮影。

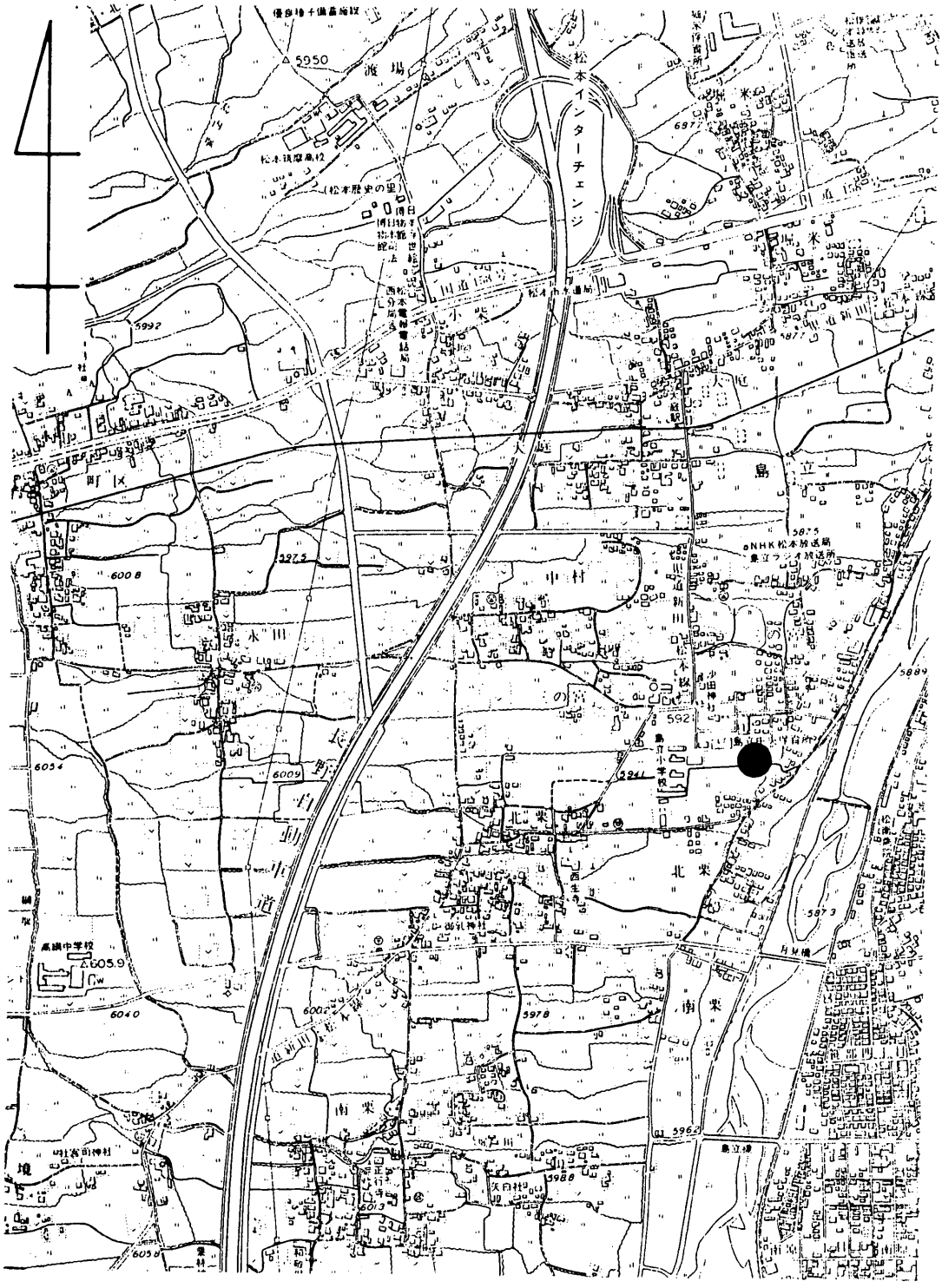
1月9日（土）　晴れ　　土壙・ピットの掘り上げ、土層図の作成（終了）。全体図の作成（継続）。遺跡の全景写真の撮影。本日で測量要員を除いて発掘作業を終了する。

1月11日（月）　晴れ　　全体図の作成（継続）。

1月12日（火）　晴れ　　全体図の作成を終了する。調査位置の座標・海抜高の測量。

1月13日（水）　晴れ　　発掘資材の片付け・運搬。業者によるプレハブの撤収。発掘調査の終了を関係機関へ連絡する。

調査終了後は、報告書の作成のため遺物洗浄、注記、復原、拓影、実測、写真撮影、トレース、図版整理、原稿執筆を行っている。


4
渡場
松本インターチェンジ
松本城
松本歴史の里
町区
中村
北栗
南栗
島立
高綱中学校
●発掘地点
0 100 500 1,000m

第１図　調査地の位置

第2章　遺跡の環境

第1節　調査地の位置

島立地区は松本市のほぼ中央に位置している。地形的には梓川と鎖川が形成した扇状地上にある。東側は北流する奈良井川によって区画されている。一帯はこれらの河川が形成した肥沃な土壌を利用して、主に水田として利用されている。また、奈良井川西岸の段丘崖周辺には南から南栗、北栗、三の宮などの集落が展開している。最近では、1988（昭和63）年3月の中央道長野線の開通にともない、周辺のほ場整備や宅地化が進んできており、地域の様相が変わりつつある。

今回の発掘調査地は長野県松本市島立4012ほかである。調査範囲は島立小学校の新設グランドの東に位置する水田である。東側140mには奈良井川が北流し、北西100mには式内社である沙田神社がある。調査地点の海抜高は591.4m前後で、西から東へ低く傾斜している。

島立地区内の発掘調査は、松本市教育委員会によって1983年度から行われている。北栗遺跡の調査としては1984年度に高綱中学校の北東、御乳神社の北西地区、1985年度に御乳神社の東側、市道高綱線の北側地区を調査している。(1)　従来の調査は北栗遺跡の南西部分であったが、今回の調査は北栗遺跡のなかでは最も東に位置している。なお、松本市教育委員会は調査地点の西側100m の地点を、島立小学校の新グランド造成に先だって調査を行っている。

註1　松本市教育委員会　1985　『松本市島立南栗・北栗遺跡　高綱中学校遺跡、条里的遺構』
　　松本市教育委員会　1987　『松本市島立北栗遺跡　条里的遺構』

第2節　地形と地質

1　位置と地形

本遺跡は松本市島立小学校の新設グランドの東、沙田神社の南に位置する。地形上は梓川扇状地の末端（扇頂からおよそ4.5km)に当たり、東側を北流する奈良井川によって切られている。段丘崖は南栗地籍から続くものであるが、高さは次第に減じ1m前後である。奈良井川の現河床とは、わずか100mの近距離にあり、崖下までは氾濫原である。また南と北に東流する小流(上流ではせぎに利用)があって、段丘崖近くになると浸食谷の深さと幅を増している。このため遺跡の地形面とはかなりの段差をつくっている。同年の夏に発掘した島立小学校新設グランドの地点とは、距離100 m で同じ地形面上にあり、耕土及び耕土下の土層が厚く、地層に共通性をもっている。

2　堆積層と礫

第2図は遺構の西壁と北壁で観察された、堆積層の地層断面である。堆積の不連続面は、扇状地の最末端に当たるので、分帯には砂礫層よりも、黒色土層に依った方が適当と思われ、(1)・(2)・(3)とした。

水田耕土を含む上部層(3)は、いずれも140cm程に達する厚い土層である。下部層(2)は、礫層を欠いた層・土混じり礫層・黒色土に礫の混入がある層など変化がみられる。最下部層(1)は、上・下部層が砂質であるのに対し、粘質である。この層の2m前後以下は、縄文中・後期の出土層で、北栗・南栗の奈良井川段丘崖に沿う地域や、南栗集落内の出土層にも関連をもつものである。

第2図の地層は、西壁（約32m）、北壁（約34m）とも連続したものの一断面で、それぞれの深さに対応した土層がみられる。堆積層は一見水平に見えるが、計測では緩く東へ傾斜している。

発掘された遺構・遺物は、表面からの深さ60～90cm、上部の黄褐色土・黒褐色～黒色土層でみられた。この深さは前述の新設グランドの地点でも同様で、類似層は暗褐色～黒色土層であった。

発掘地面全体の堆積層は、すべて第2図のような広がりでなく、実際の発掘では1・2・3のほか、4のような堆積が介在する状態である。

堆積の方向（流れの方向）は、発掘面積が狭かったため判断が難しい状況であった。しかし発掘面の中央に現れた、ほぼ東西性の礫層の堆積（厚さ35～40cm）や、北壁の中央から南東へ延び前者につながるように堆積した礫層からは、西から東へ、北東から南東への方向が考えられる。

礫の大きさは、北壁の下部礫層で3cm以下、西壁の同じ層では南に行くにしたがい7cm以下の細・小・中の円礫である。最下部層では10～15cm大の礫が含まれていた。

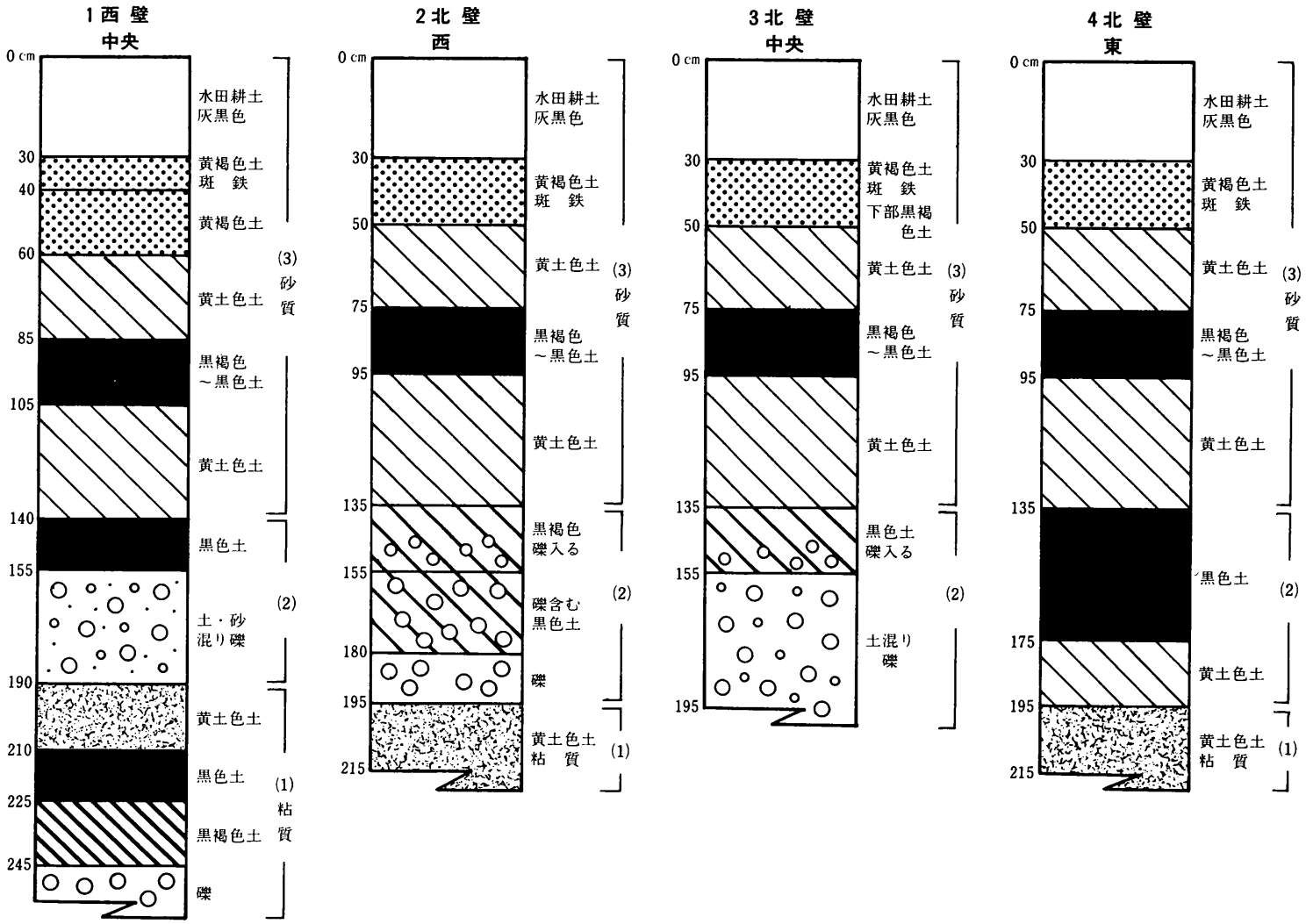
礫の種類は、硬砂岩・砂岩・ホルンフェルス（砂岩・粘板岩）・粘板岩・チャートで、わずかの花崗岩・安山岩・輝緑凝灰岩から、梓川系統と考えられた。これは新設グランドの地点と同様で、堆積（流れ）の方向と一致する。また、土層中の黄土色土はローム質土壌（二次）である。

3　遺跡の立地

堆積層の形成の働きは、礫層や黒色土層でみると3回以上が数えられる。遺構・遺物の出土は厚い上部層の中間に位置するが、これ以降にも新たな堆積があったものと思われる。ただ同時異相を示す礫層が、調査地内にないため推定するほかない。今、縄文中・後期の面を－2mとし、単純計算をすると（堆積平均0.4～0.5mm／年速度）、堆積面の形成は表面から30～45cmが平安時代中・後期、50～60cmが古墳時代となる。それ以下が古墳時代以前の堆積となるので、上部層の上部と下部の境界と考えられる。この古墳時代以前の層上あるいは層中に遺物が発見されることになる。

縄文期の堆積を－2mとすると、縄文期の面と現在の奈良井川の河床面とはほとんど差がない。梓川扇状地の堆積の範囲と奈良井川の浸食・堆積の問題が再浮上し(1)、環境復原に興味がもたれる。

註1　松本市教育委員会　1985　『松本市島立南栗・北栗遺跡　高綱中学校遺跡、条里的遺構』P. 15


1西 壁
中央
0 cm
30
40
60
85
105
140
155
190
210
225
245
水田耕土
灰黒色
黄褐色土
斑 鉄
黄褐色土
黄土色土
黒褐色
～黒色土
黄土色土
黒色土
土・砂
混り礫
黄土色土
黒色土
黒褐色土
礫
(3)
砂
質
(2)
(1)
粘
質
2北 壁
西
0 cm
30
50
75
95
135
155
180
195
215
水田耕土
灰黒色
黄褐色土
斑 鉄
黄土色土
黒褐色
～黒色土
黄土色土
黒褐色
礫入る
礫含む
黒色土
礫
黄土色土
粘 質
(3)
砂
質
(2)
(1)
3北 壁
中央
0 cm
30
50
75
95
135
155
195
水田耕土
灰黒色
黄褐色土
斑 鉄
下部黒褐
色土
黄土色土
黒褐色
～黒色土
黄土色土
黒色土
礫入る
土混り
礫
(3)
砂
質
(2)
4北 壁
東
0 cm
30
50
75
95
135
175
195
215
水田耕土
灰黒色
黄褐色土
斑 鉄
黄土色土
黒褐色
～黒色土
黄土色土
黒色土
黄土色土
黄土色土
粘 質
(3)
砂
質
(2)
(1)

第2図　地層断面図

第3節　周辺遺跡

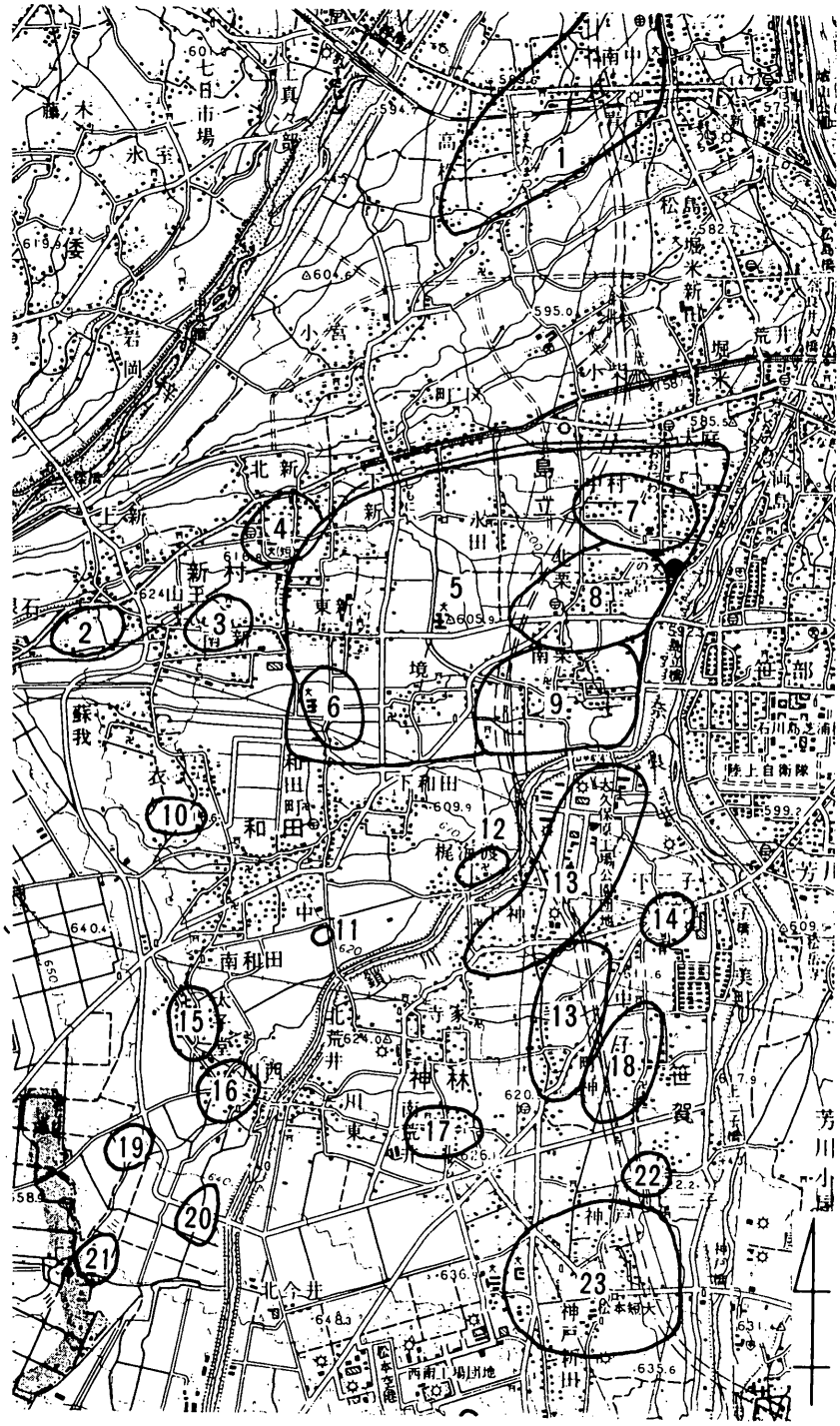
奈良井川西岸の島立地区周辺には多くの遺跡が分布している。西方の新村地区では終末期古墳で知られる秋葉原遺跡・安塚古墳群がある。南方では鎖川を渡った右岸に下神・町神・下二子・中二子遺跡などの奈良・平安時代を中心にした集落遺跡が展開している。さらにその南方ではくまのかわ・神戸遺跡があり、奈良・平安時代のほかに縄文時代の遺構・遺物が出土している。また、西南方には和田・西和田遺跡がある。和田八幡原では旧石器時代の遺物（東内野型尖頭器）が出土している。さらに南方の鎖川左岸には川西・川西開田・三間沢川左岸・境窪遺跡が分布している。境窪遺跡では弥生・平安時代の遺物が出土している。三間沢川左岸遺跡は1987（昭和62）年に松本市教育委員会によって発掘調査され、平安時代の竪穴式住居130、建物址11ほかが検出され、緑釉陶器、八稜鏡、帯金具、「長良私印」銘の銅印などが出土している。

島立地区内の遺跡については、新村・島立条里的遺構とされている巨大な遺跡のネット内に複数の集落遺跡が包含されている。条里的遺構の西南部には高綱中学校遺跡があり、竪穴状遺構・建物址が調査されている。また、奈良井川左岸の段丘上には北から三の宮・北栗・南栗遺跡が展開している。この3遺跡については、最近の長野県埋蔵文化財センター、松本市教育委員会の発掘調査によって膨大な資料が得られている。その成果は一部が既に報告されている。しかし、この地域の発掘調査は今後も予定されており、現在も調査・整理は継続中である。

なお、今回の調査に先立って行われた島立小学校の新設グランド内の発掘調査では古墳時代後期の竪穴式住居址4・建物址5、平安時代の中期～後期の竪穴式住居址3・建物址3、このほかに竪穴状遺構・土壙・ピット・溝が検出されている。また、検出面・遺構内からは古墳時代末から平安時代後期にわたる多量の遺物が出土している。このうち古墳時代集落の資料は島立地区周辺の古代集落の変遷を考えるうえで貴重なものである。

このほかに1987年度に島立地区内で行われた発掘調査は次のとおりである。県道新田・松本線の西側の永田地区では奈良・平安時代の集落（竪穴式住居址17・建物址6・溝2）が検出され、長野県埋蔵文化財センターで調査した三の宮遺跡のさらに西方へ古代の集落が広がることを確認している。さらに、現在の永田集落の北北西の水田では方形の周溝に区画された中世の居館址と考えられる遺構（竪穴状遺構8・土壙17・ピット315)と、多量の遺物（内耳土器・土師質土器・陶磁器・硯・石臼・鉄器・宋銭・炭化米ほか）を検出している。また、小柴地区の発掘調査では、遺構は検出されなかったが、北宋銭1点・陶磁器約30点を採集している。

島立地区内に南北に設定された中央道長野線という長大なトレンチとほ場整備事業等に起因する巨大な試掘壙はまもなくその調査を終えようとしている。これらの成果を総合的に分析して、周辺遺跡群の歴史の位置づけを行うことが今後の課題である。



1．島内遺跡群
（1984～87）
2．安塚古墳群
（1978）
3．秋葉原遺跡（1982）
4．新村遺跡
5．新村・島立条里的遺構
（1984～87）
6．高綱中学校遺跡
（1984・85）
7．三の宮遺跡（1986）
8．北栗遺跡（1985～88）
9．南栗遺跡（1983～85）
10．西和田遺跡
11．和田町遺跡
12．梶海渡遺跡（1985）
13．下神・町神遺跡（1983）
14．下二子遺跡
15．太子堂遺跡
16．川西遺跡（1986）
17．南荒井遺跡
18．中二子遺跡
19．三間沢川左岸遺跡
（1987）
20．川西開田遺跡
21．境窪遺跡
22．くまのかわ遺跡（1981）
23．神戸遺跡群（1979）

（　）内市教委調査年度

●発掘地点

0　500　1,000　2,000 m

第3図　周辺遺跡

第４図　調査の範囲

第3章　調査結果

第1節　調査の概要

1　調査の概要

今回の調査予定地は以前に業者による壁土原料の採取が行われたため地形が削平され、周辺の地形よりも低くなっていた。そこで、当初の発掘調査地は削平が行われなかった1区画の水田に設定した。調査にあたっては、北栗遺跡の範囲の確認（東限の確認）、遺跡の年代の上限の確認を目的とした。

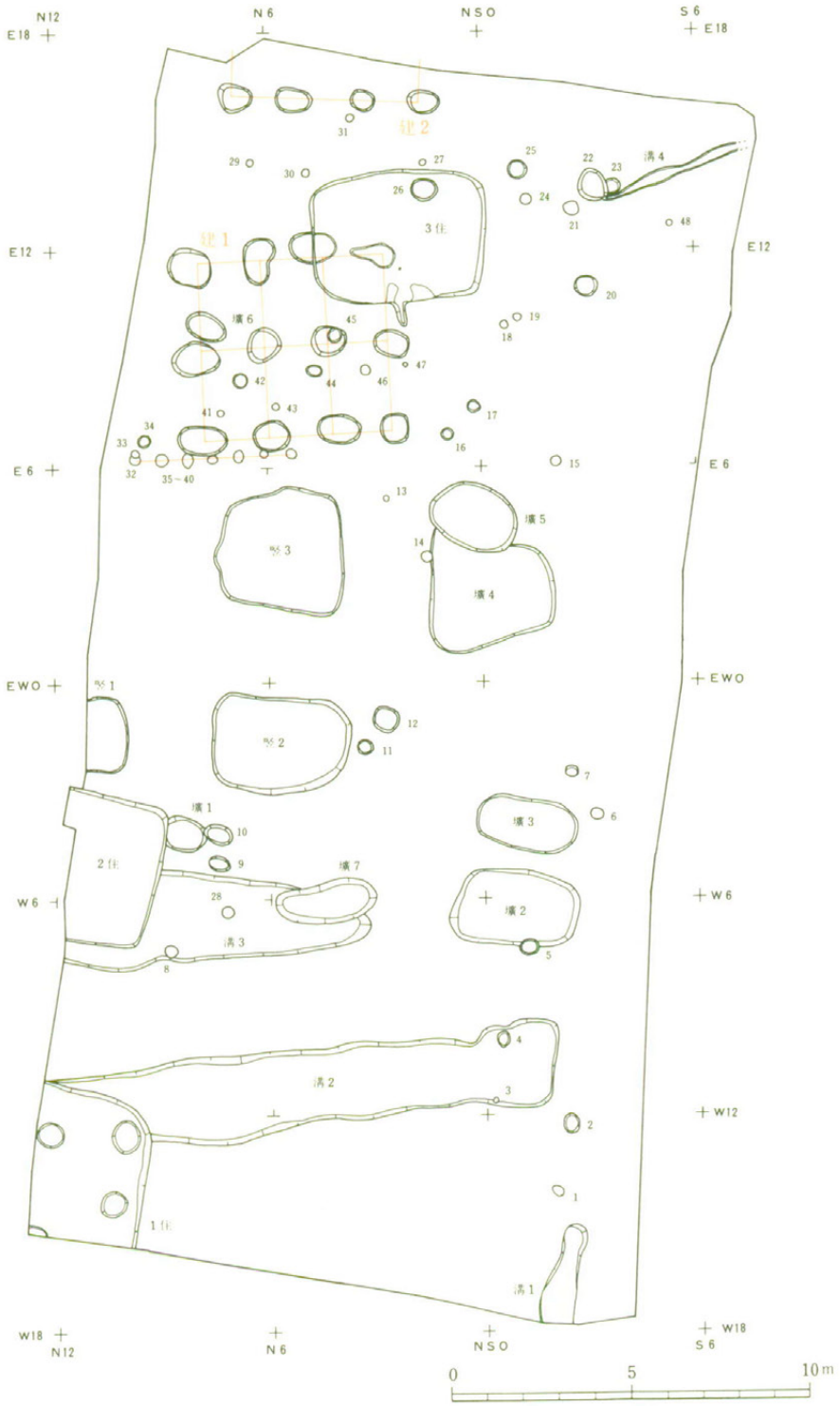
発掘にあたっては、最初に重機を使用して耕作土とその直下の鉄分の集積層を除去した後に遺構の検出を行った。その結果、竪穴式住居址3、竪穴状遺構3、建物址2、土壙7、ピット48、溝4を検出することができた。遺物は住居址・建物址などから少量の土師器・須恵器・砥石1点・鉄器1点が出土している。遺構の時期についてはこれらの遺物からみて奈良時代の中頃から平安時代後期が考えられる。この遺構検出面を第1発掘面とした。

また、第1発掘面に南接する、削平されて1段低い水田の耕作土及び鉄分の集積層を重機を使用して除去したところ、礫を多量に含む黒褐色土層中から土器が数片出土し、遺構が存在する可能性が考えられた。しかし、この面が遺構の覆土と区別しにくい暗色の土層であること、多量の礫を包含することから遺構の検出が困難であると判断した。そこで、ふたたび重機を使用して黒褐色土を除去することにした。そして、直下の暗黄灰色土層から遺構を検出することができたので第1検出面を調査した北側の水田もこの面まで掘り下げて併せて調査をすることにした。その結果、土壙14、ピット82、自然流路の溝を検出することができた。この面を第2発掘面とした。遺構に伴う遺物はほとんどなかったが、検出面で縄文土器と土師質の土器を採集している。この検出面下のX層は縄文土器の包含層と考えられることから、これらの遺構は縄文時代から古墳時代の間に帰属するものと考える。なお、南東部の検出面で焼土面を確認したが、遺構に結び付けることはできなかった。

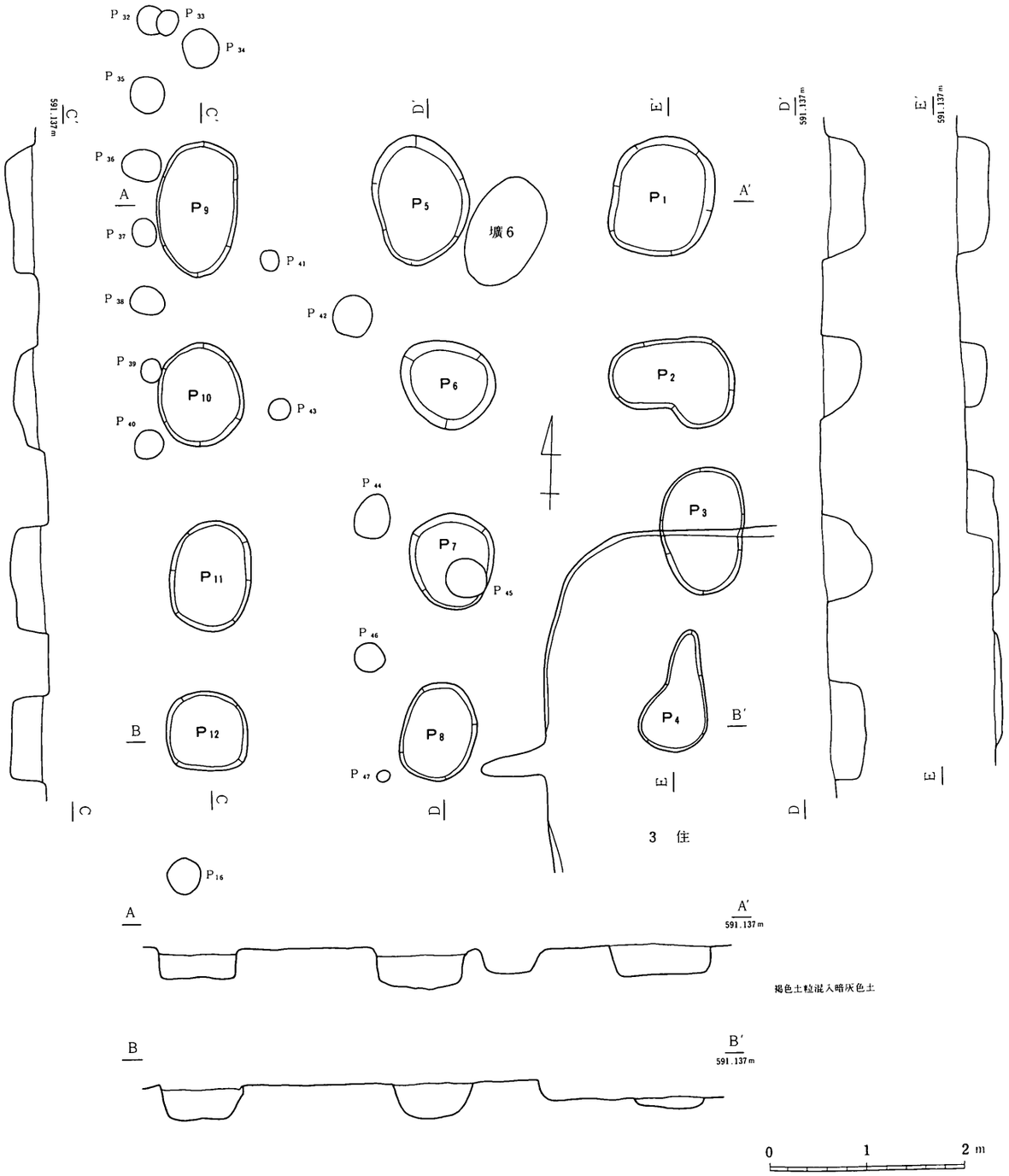
なお、土層の堆積状況の把握に努めた結果、第1発掘面から第2発掘面の間にも遺構検出面があることが判明したが、重機による掘り下げの際に削平してしまう結果になった。

2　土層

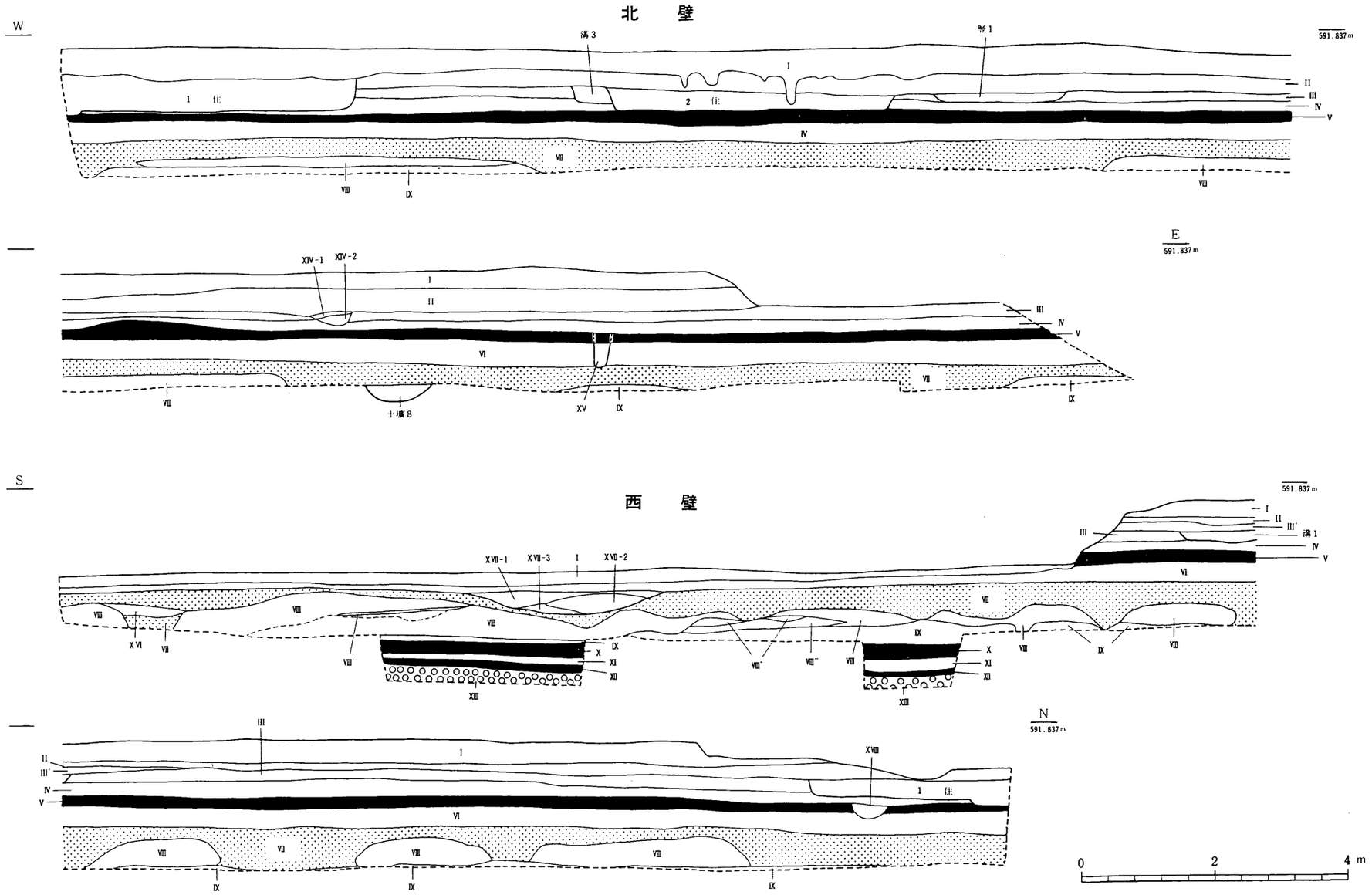
今回の発掘調査地点は奈良井川左岸に沿って南北にのびる段丘の縁辺上に位置し、以前の島立地区の発掘調査地点と地形の趣を異にしているため、土層の堆積状況を把握することにした。土層の観察は発掘区の北壁と西壁で行った。土層の堆積は次の通りである。



第5図　遺構配置図（第1発掘面）


P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P16
P9
P10
P11
P12
P5
P6
P7
P8
P1
P2
P3
P4
廣6
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
591.137m
3 住
褐色土粒混入暗灰色土
0
1
2 m

第12図　建物址 1



I　灰色土(耕作土)
II　褐色土粒混入黄灰色土
III　暗灰褐色土
III'　褐色土粒混入暗灰褐色土
IV　褐色土粒混入黄灰色土(やや砂質)
V　暗褐色土
VI　(暗)黄灰色土
VII　礫混入黒褐色土
VIII　砂礫
VIII'　暗灰色土(砂質)
VIII''　灰色砂
VIII'''　礫混入黄灰色砂
IX　暗黄灰色土
X　炭化物混入暗褐色土
XI　暗黄灰色土
XII　暗褐色土
XIII　砂礫(基盤層)
XIV-1　暗褐色土(やや砂質)
-2　礫混入黄灰色砂　(溝？)
XV　暗黄褐色土(ピット)
XVI　暗黄灰色土(溝・土壙？)
XVII-1　黄灰色土(砂質)
2　黄灰色土混入砂礫　(溝)
3　黄灰褐色土
XVIII　暗黄褐色土(土壙)

第7図　土層図

Ⅰ層　灰色土（耕作土）

Ⅱ層　褐色土粒混入黄灰色土（溶脱してきた鉄分の集積層である。第1号住居址の掘り込み面。）

Ⅲ層　暗灰褐色土（第1発掘面。北壁の東半部では褐色を呈している。）

Ⅳ層　褐色土粒混入黄灰色土（やや砂質）

Ⅴ層　暗褐色土

Ⅵ層　（暗）黄灰色土 遺構検出面（北壁東半の断面でピットを検出している。）

Ⅶ層　礫混入黒褐色土（北壁の東半では礫の混入はほとんど見られない。）

Ⅷ層　（灰色）砂礫(Ⅶ層の堆積が進行している間に、河川の氾濫等でⅨ層の直上からⅦ層の下部に堆積したものと考えられる。)

Ⅸ層　暗黄灰色土（第2発掘面）

Ⅹ層　炭化物混入暗褐色土（縄文土器の破片が出土しており、包含層と考えられる。）

XⅠ層　暗黄灰色土（Ⅸ層よりも灰色の度合が強い。）

XⅡ層　暗褐色土

XⅢ層　砂礫層（発掘地点の南で土取りが行われた際の観察では、この層から採土壙の最深部の約3ｍ下まで砂礫が堆積していた。）

土層の観察所見から、本遺跡では基盤層のXⅢ層以降に土の堆積が始まっており、Ⅸ層からⅦ層の堆積の間は河川の氾濫等の影響をかなり受けているが、それ以降は安定した土層の堆積がみられる。基本的には上層の暗褐色土と下層の暗黄灰色土がセット（Ⅴ－Ⅵ層、Ⅶ－Ⅸ層、Ⅹ－XⅠ層）になり、暗褐色土はある時期には地表面に近いものだったと考える。そして遺構は暗褐色土層から掘り込まれていたと考えられる。Ⅴ層以下ではⅥ層・Ⅸ層で遺構が検出されていることと、Ⅹ層で縄文土器が出土しているので、XⅠ層も遺構検出面になる可能性があると考えられる。

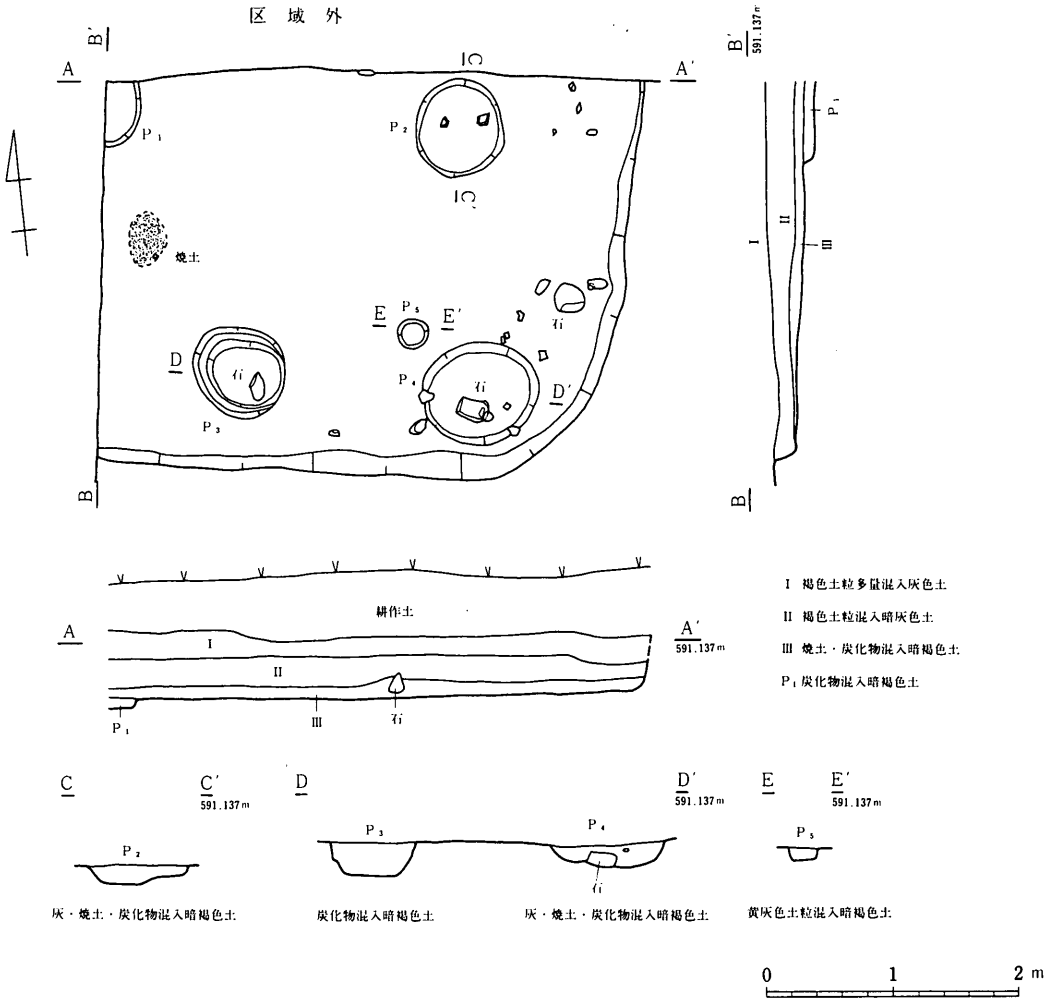
第2節　遺　　構

1　第1発掘面

1）住居址

第1号住居址

本址は発掘区の北西隅に位置しており、溝2より新しい。発掘区域外にかかるため、東壁2.90ｍ、西壁3.40ｍを発掘しただけで規模は不明だが平面形は方形を呈すると思われる。壁はやや斜めに立ち上がり、検出面からの壁高は約18cmである。なお、発掘区東壁の土層断面観察では耕作土下の褐色土粒混入黄灰色土中から掘りこまれていると考えられ、壁高は50cm前後になる。なお、覆土のⅠ



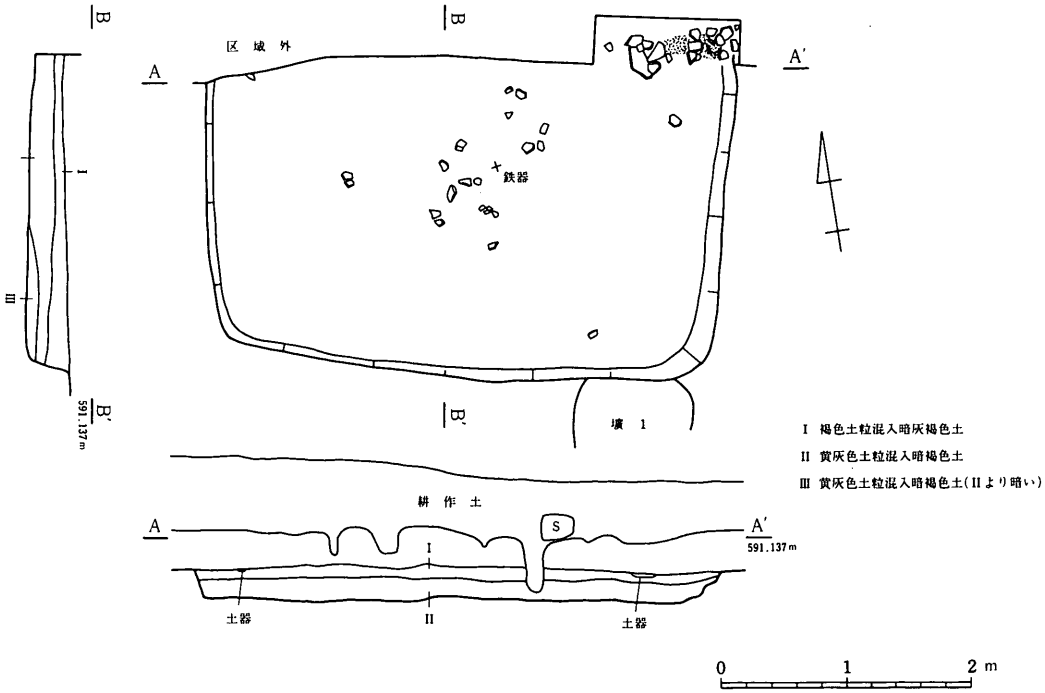
第8図　第1号住居址

層は耕作土層からの鉄分などが集積しており判然としない。III層は焼土・炭化物を混入する暗褐色土である。床面は暗灰褐色土層まで掘り込んでつくられており、やや堅くしまっている。

カマドは調査範囲では検出できなかったが、東壁際とP_5内より被熱している大礫が出土しておりカマドを構築していた石の可能性がある。しかし、焼土は床面の西側に多くみられ、カマドの位置は推定できなかった。

ピットはP_1(？×？×7cm)、P_2(75×69×15cm)、P_3(73×71×26cm)、P_4(93×80×17cm)、P_5(25×22×9cm)がある。P_1～P_4は覆土が焼土・炭化物を混入する暗褐色土で共通している。P_5はやや浅いが柱穴の可能性がある。

遺物は床面から少量の土師器の皿・羽釜が出土しており、P_2からは高台をもつ皿が出土している。これらの遺物から本址の時期はXIII期であると考える。



第9図　第2号住居址

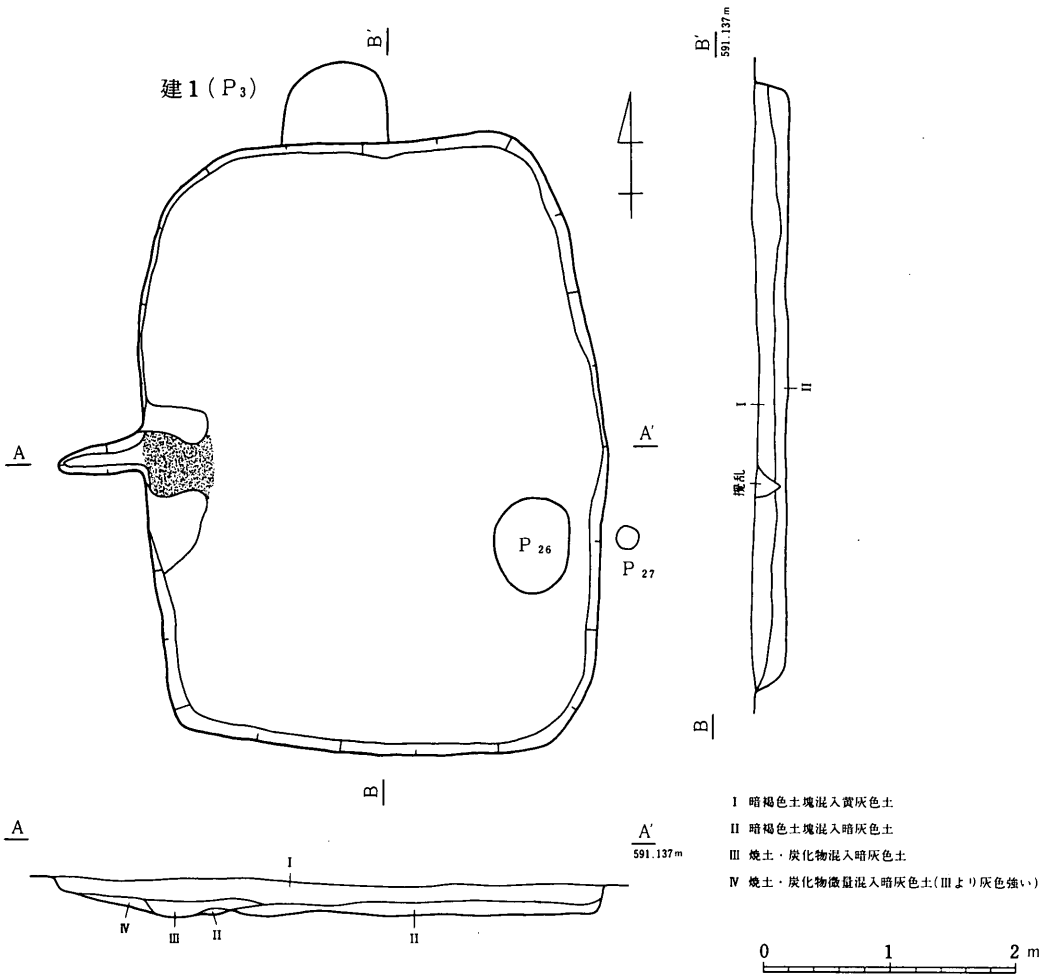
第2号住居址

本址は発掘区の北側、やや中央よりに位置しており、溝3よりも新しい。区域外にかかるため南側半分を調査したにすぎない。南壁は3.8m程あり、平面形はおそらく方形を呈し、主軸方向はN－105°－Eである。壁はやや斜めに立ち上がり、壁高は30cm前後である。床面は暗褐色土層(V層)まで掘り込まれており、堅くしまっている。

カマドは調査範囲内では検出できなかったが、東側の区域外に接する部分で、焼土・灰色粘質土と土師器の甕2個体が出土している。これらは床面よりも10cm程高い位置にあるが土層の断面観察によるとこの部分の床面が傾斜しながら2段に立ち上がっている。このことから土器が出土した付近はカマドに近く、本体は東壁中央にあったものと考える。

遺物は覆土I層（褐色土粒混入暗灰褐色土）の下面で土師器の甕・小形甕、鉄器1点が出土しており、床面からはほとんど出土していない。

本址の時期は東側のカマド付近で検出した甕などからIII～IV期と考える。



第10図　第3号住居址

第3号住居址

本址は発掘区の東寄りに位置し、建物址1よりも新しくピット26よりも古い。規模3.6×4.8m、面積16.28m²で平面形は長方形を呈し、主軸方向はN－92°－Wである。壁はやや斜めに立ち上がり、壁高は28cm前後である。覆土は暗褐色土塊を混入する黄灰色土層と暗灰色土層があるが、遺物はほとんど出土していない。床面は暗褐色土層（V層）まで掘り込まれておりやや堅い。カマドは西壁中央に位置している。カマドの構造は粘土カマドで、袖部は地山を削りだしているようである。床面は浅く掘り込まれ、煙道は斜めに立ち上がり70cm程西側へのびている。カマド内には灰・焼土・炭化物がみられる。遺物は床面から少量の土師器の坏・甕の破片が出土したのみで、図示できるものはなかった。本址の時期は遺物と建物址1との新旧関係からⅣ期に近い時期と考える。

2）竪穴状遺構

本遺跡では平面形が方形または長方形を呈する比較的大形の土壙が検出されている。本報告ではこれらを竪穴状遺構として扱った。これらは検出面からの壁高が浅く、覆土の直下に鉄分の集積がみられる点で共通している。遺構の時期については遺物の出土・他の遺構との新旧関係がないため確定できないが、黄灰色土の覆土をもつ竪穴状遺構2・3は本遺跡のなかでは比較的新しい時期に属すると考えたい。なお、土壙4は規模の点では竪穴状遺構に該当するが、覆土の直下に鉄分の集積がみられない点で区別して扱った。

竪穴状遺構1

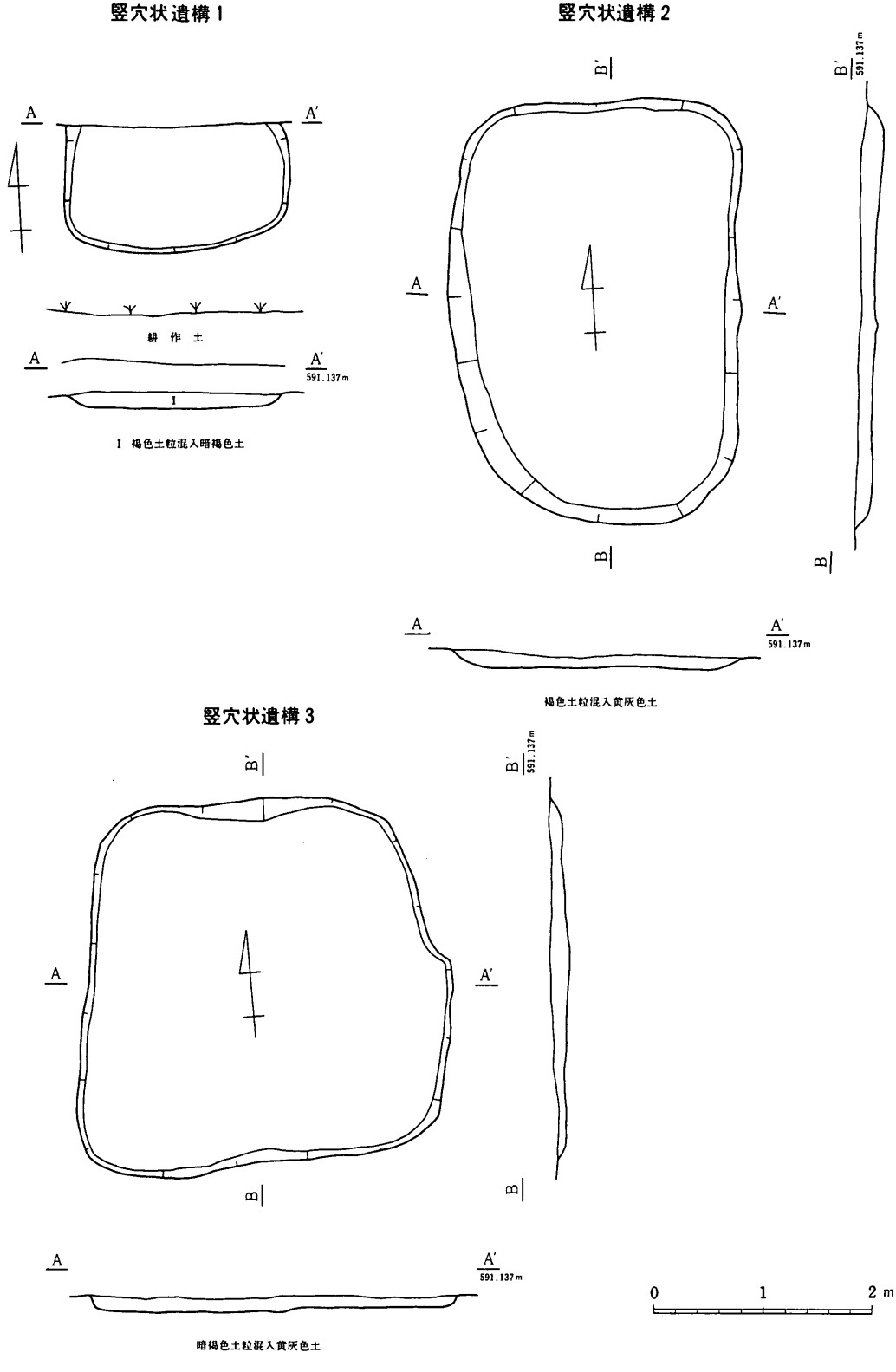
本址は発掘区の北端、第2号住居址の東側に位置している。区域外にかかるため南半分程を調査したにすぎないが、南壁は2.0m程で平面形は隅丸の方形または長方形を呈すると考える。壁は斜めに立ち上がり、壁高は15cm程である。覆土の直下は鉄分の集積が激しく、底面は褐色を混じえた灰褐色土を呈して明確に確認できた。遺物は出土していない。時期は不明である。

竪穴状遺構2

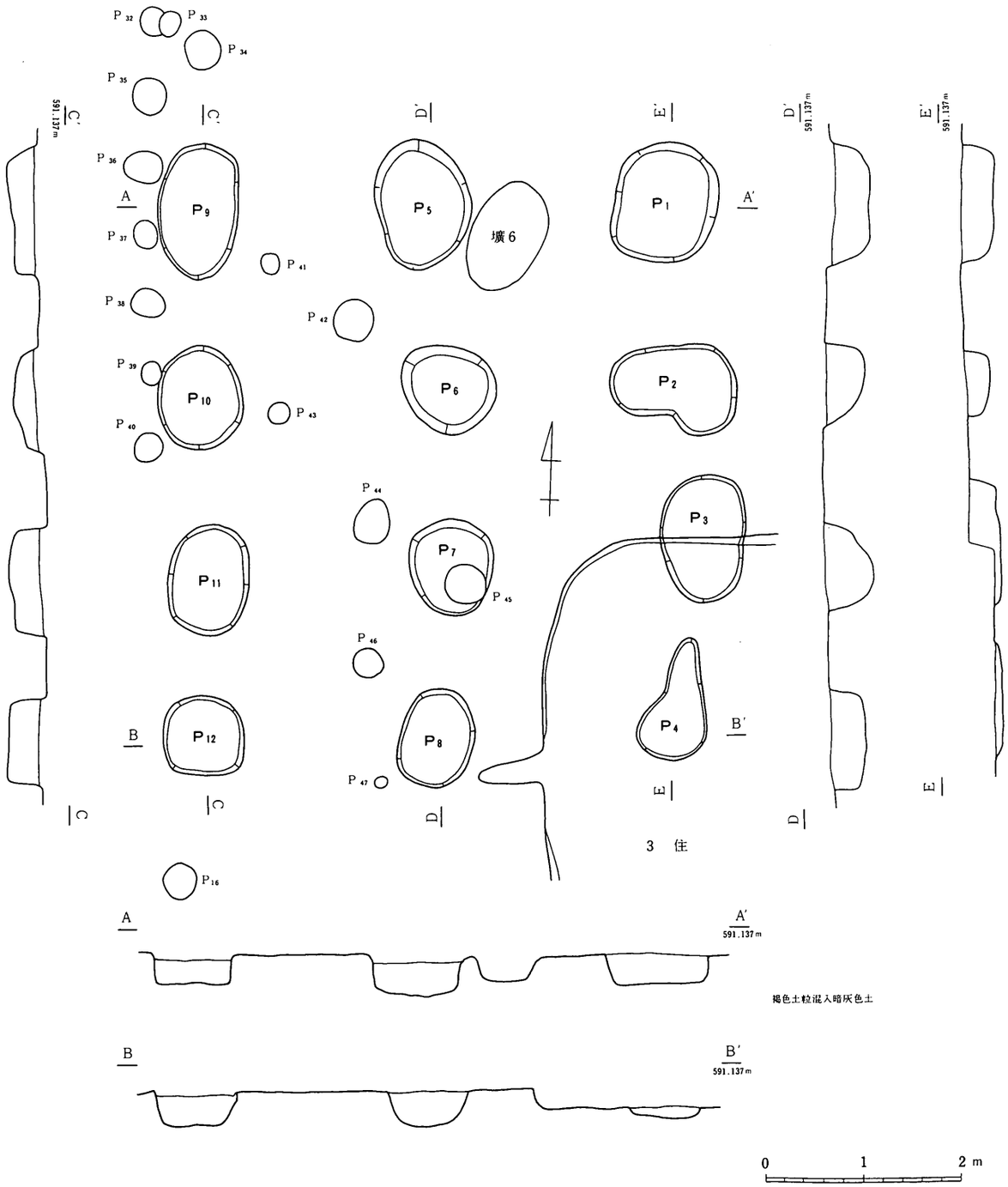
本址は発掘区の中央、竪穴状遺構1の南側に位置している。規模は3.8×2.7m、面積9.16m²で、平面形は隅丸の不整長方形である。壁は斜めに立ち上がり、検出面からの壁高は北・西壁で15cm、南・東壁で10cm前後である。覆土は褐色土粒混入の黄灰色土で、覆土の直下は溶脱してきた鉄分の集積が激しく、底面には褐色の斑紋がみられ、やや堅い。遺物は土師器の小破片が出土しているだけである。時期は不明である。

竪穴状遺構3

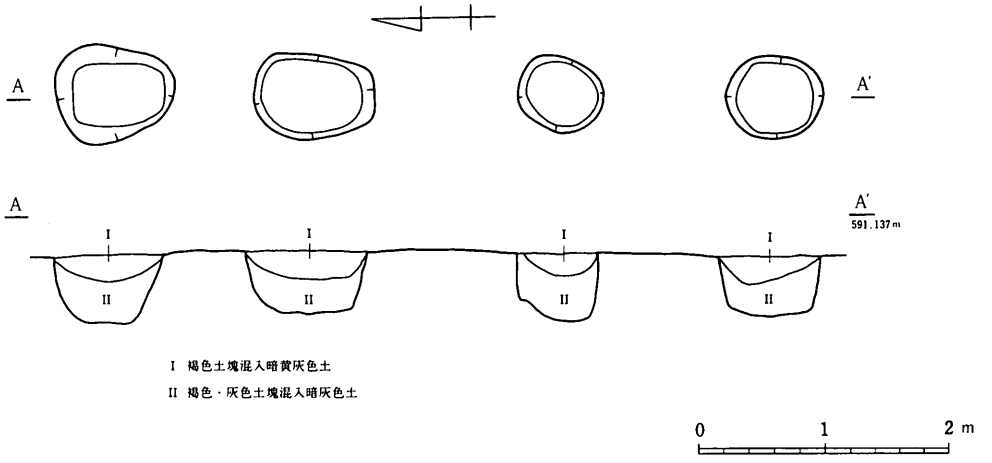
発掘区の中央、竪穴状遺構2の東、建物址1の西に位置している。規模は3.1～3.4×3.3m、面積10.28m²で、平面形は隅丸の方形を呈するが、東側はわずかに外側へ張り出している。壁はやや斜めに立ち上がり、検出面からの壁高は約10cmである。覆土は暗褐色土粒の混入する黄灰色土で、覆土の直下は鉄分の激しい集積がみられる。底面はやや堅い。遺物は出土していない。本址は当初は規模・平面形から竪穴式住居と考えていたが、壁高が他の住居址に較べて浅く、覆土と床面には鉄分の集積がみられたこと、カマド・ピット等の施設がないことから竪穴状遺構として扱った。時期は不明である。


竪穴状遺構 1
A
A′
耕 作 土
A
A′
591.137m
I
I 褐色土粒混入暗褐色土
竪穴状遺構 2
B′
B′
591.137m
A
A′
B
B
A
A′
591.137m
褐色土粒混入黄灰色土
竪穴状遺構 3
B′
B′
591.137m
A
A′
B
B
A
A′
591.137m
暗褐色土粒混入黄灰色土
0
1
2 m

第11図　竪穴状遺構


P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P16
P9
P10
P11
P12
P5
P6
P7
P8
P1
P2
P3
P4
壙6
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
591.137m
3 住
褐色土粒混入暗灰色土
0
1
2 m

第12図　建物址 1



第13図　建物址 2

3 ）建物址

建物址 1

本址は発掘区の北西に位置し、第 3 号住居址・ピット39・45よりも古い。規模は南北 3 間・東西 2 間で、面積 25.72m² の総柱式の建物址である。主軸方向はN－ 3°－Eで、柱間寸法は 2 間側で 2.3～2.4m、3 間側で約1.8mである。柱を据えるためのピットはP_1(124×104×33cm)、P_2（92×127×25cm）、P_3（129×82×32cm）、P_4（125×68×33cm）、P_5（132×94×35cm）、P_6（90×95×38cm）、P_7（99×85×48cm）、P_8（100×76×36cm）、P_9（139×82×28cm）、P_{10}(106×85×22cm）、P_{11}（114×82×32cm）、P_{12}（81×81×29cm)がある。このうちP_3の南半分とP_4は第 3 号住居址の床面で検出されている。また、P_2・P_4は柱を引き抜いたためかピットの壁が斜め外側に立ち上がっている。各ピットは平面形が楕円形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は暗褐色土層（Ⅴ層）まで掘り込まれており、覆土は褐色土粒混入暗灰色土の 1 層で柱痕は検出できなかった。P_8 からは須恵器の坏が出土しており、この遺物から本址の時期はⅣ期以降と考える。

建物址 2

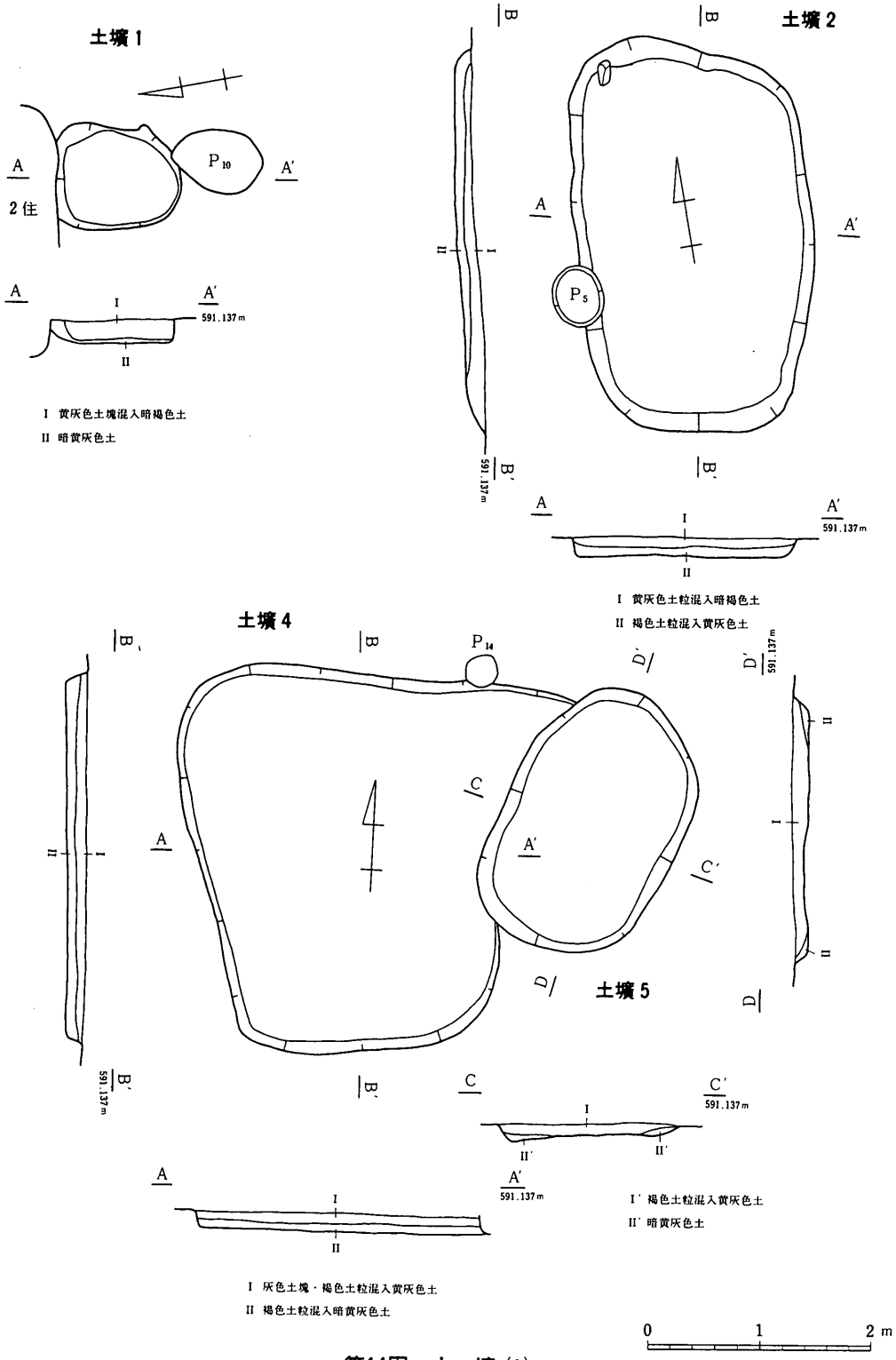
本址は発掘区の東端に位置している。東側は過去に削平されているため、建物址の西側一列を調査できたにすぎない。規模は南北が 3 間で、主軸方向はN－ 1°－Eである。柱間寸法は1.6～1.9mである。ピットはP_1（92×75×54cm）、P_2（97×69×49cm）、P_3（69×61×52cm）、P_4（78×65×46cm）がある。各ピットは不整円か楕円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は暗褐色土層（Ⅴ層）まで掘り込まれており、覆土は 2 層に分かれるが、柱痕は検出できなかった。遺物はP_2 から土師器の甕の破片が出土している。時期は第 2 号住居址に近接すると考える。

4）土壙・ピット

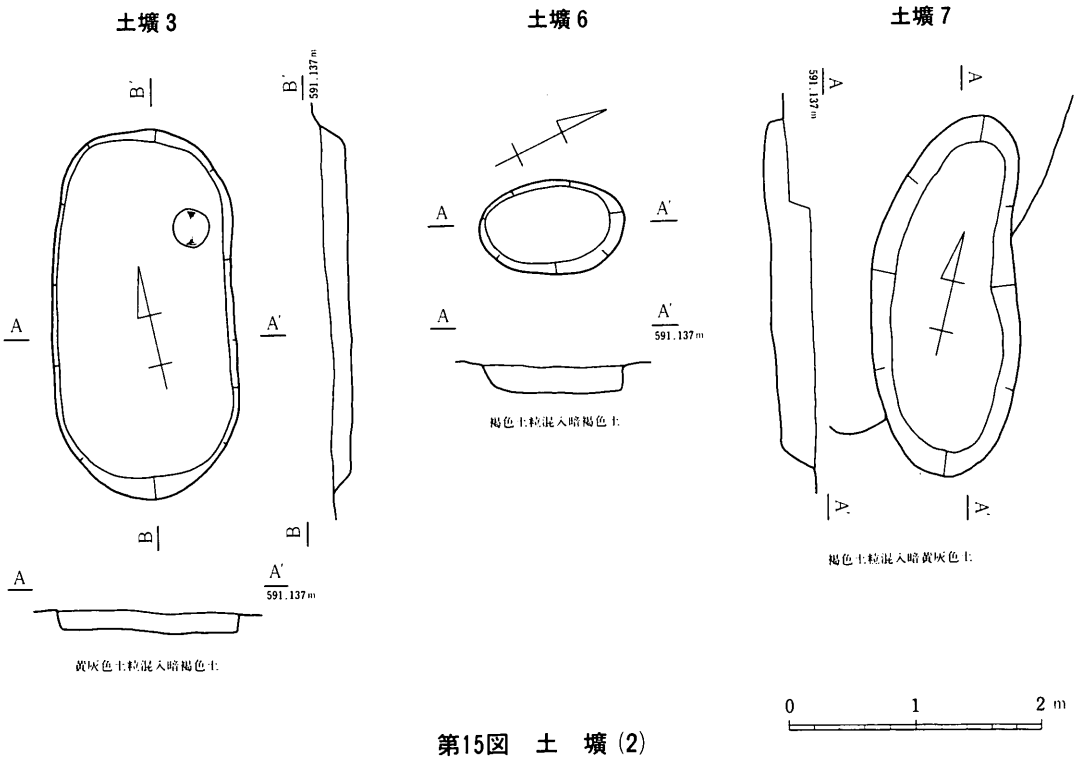
今回の調査では住居址に伴うピット、建物址を構成するピットを除いた穴を土壙・ピットとして扱った。本報告では、直径か長軸が1mを超えるような比較的大きな穴を土壙、それよりも小さいものをピットとしている。土壙は7基、ピットは48基が検出されている。

土壙1は小形の土壙で平面形は楕円形を呈し、第2号住居址・ピット10よりも古い。検出面からの壁高は22cmで、覆土は上層が黄灰色土塊混入暗褐色土、下層が暗黄灰色土である。土壙2は発掘区の中央、やや南西寄りに位置し、ピット5よりも古い。規模は353×215×17cmで、平面形は隅丸長方形を呈する。覆土は上層が黄灰色土粒混入暗褐色土、下層が褐色土粒混入黄灰色土で、壁はやや斜めに立ち上がっている。土壙3は土壙2の東に位置している。規模は289×147×20cmで、平面形は長楕円形を呈している。覆土は土壙2の上層と同じ黄灰色土粒混入暗褐色土で、壁は斜めに立ち上がっている。土壙4は発掘区の中央、やや東寄りに位置し、土壙5・ピット14よりも古い。規模は東西は不明だが、南北347cmで、平面形は不整隅丸方形を呈している。検出面からの壁高は19cmでやや斜めに立ち上がっている。覆土は上層が灰色土塊・褐色土粒混入黄灰色土、下層が褐色土粒混入暗黄灰色土である。遺物として土師器の小形丸底坩が出土している。土壙5は規模が244×159×15cmで、平面形は楕円形を呈している。壁は斜めに立ち上がっている。覆土は褐色土粒混入黄灰色土で、土壙4の上層とよく似ている。土壙6は発掘区の北東、建物址1のP_5の東側に位置している。規模は118×75×21cmの楕円形を呈している。覆土は褐色土粒を混入する暗褐色土である。土壙7は発掘区の中央西寄りに位置し、溝3よりも新しい。規模は283×117×32cmで、平面形は長楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がっている。覆土は褐色土粒混入暗黄灰色土である。本址からは奈良時代と考えられる土師器の甕の破片が出土している。全体的にみれば検出面での覆土は暗褐色土の土壙2・3・6と(暗)黄灰色土の4・5・7がある。本遺跡の重複する遺構では暗褐色土の覆土をもつ遺構が灰色・黄灰色の覆土をもつ遺構より古い傾向があるので、前者の土壙も第1発掘面のなかでは古い時期になる可能性がある。

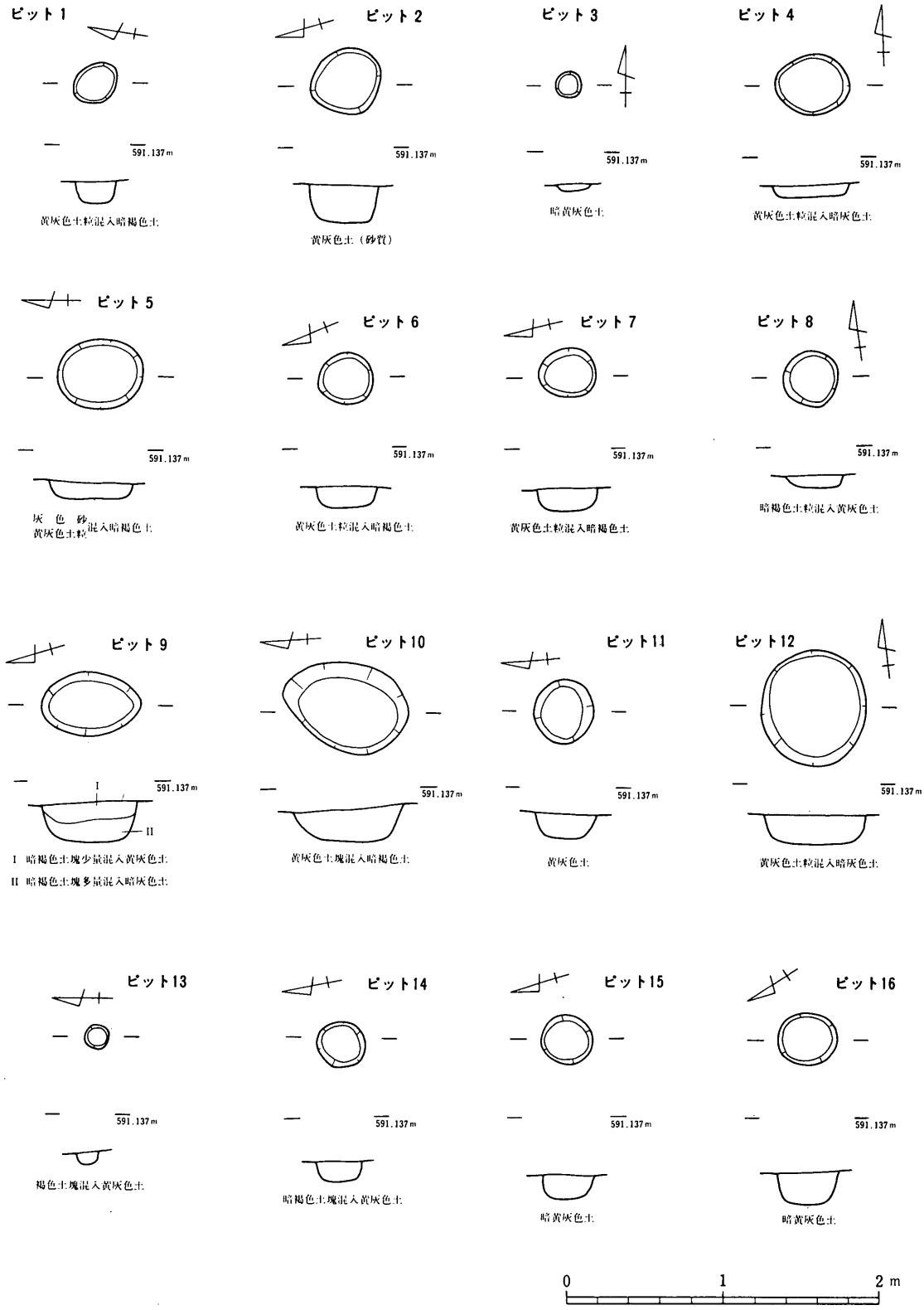
ピットは発掘区の東半に多くみられ、とくに建物址1付近に集中している。ピットが他遺構と重複する場合はピットのほうが新しいものが大半である。検出面での覆土には暗褐色土と、黄灰色土・(暗)灰色土をもつものがある。これらも土壙と同様に前者のほうが古い可能性がある。次に特徴的なピットについて述べる。ピット20・42は2段底のピットである。また、建物址1の西側に直線的に並んでいるピット32・(33)・35～40は褐色土塊が混入する暗灰色土で覆土の直下には鉄分の集積が帯状にみられる。検出面からの覆土の厚さは5cm前後と浅いが、本来はもっと深かったと考えられる。これらのピットについては覆土が全く共通することから同時期・一連の遺構と考えることができ、柵列のような構造物があったと考えたい。遺物も出土していないので時期を特定できないが、ピット39が建物址1よりも新しいので、Ⅳ期以降と考えることができる。


土壙1
A
A'
2住
P10
591.137m
I 黄灰色土塊混入暗褐色土
II 暗黄灰色土
土壙2
B
B'
P5
591.137m
I 黄灰色土粒混入暗褐色土
II 褐色土粒混入黄灰色土
土壙4
土壙5
P14
C
C'
D
D'
I' 褐色土粒混入黄灰色土
II' 暗黄灰色土
I 灰色土塊・褐色土粒混入黄灰色土
II 褐色土粒混入暗黄灰色土
0 1 2 m

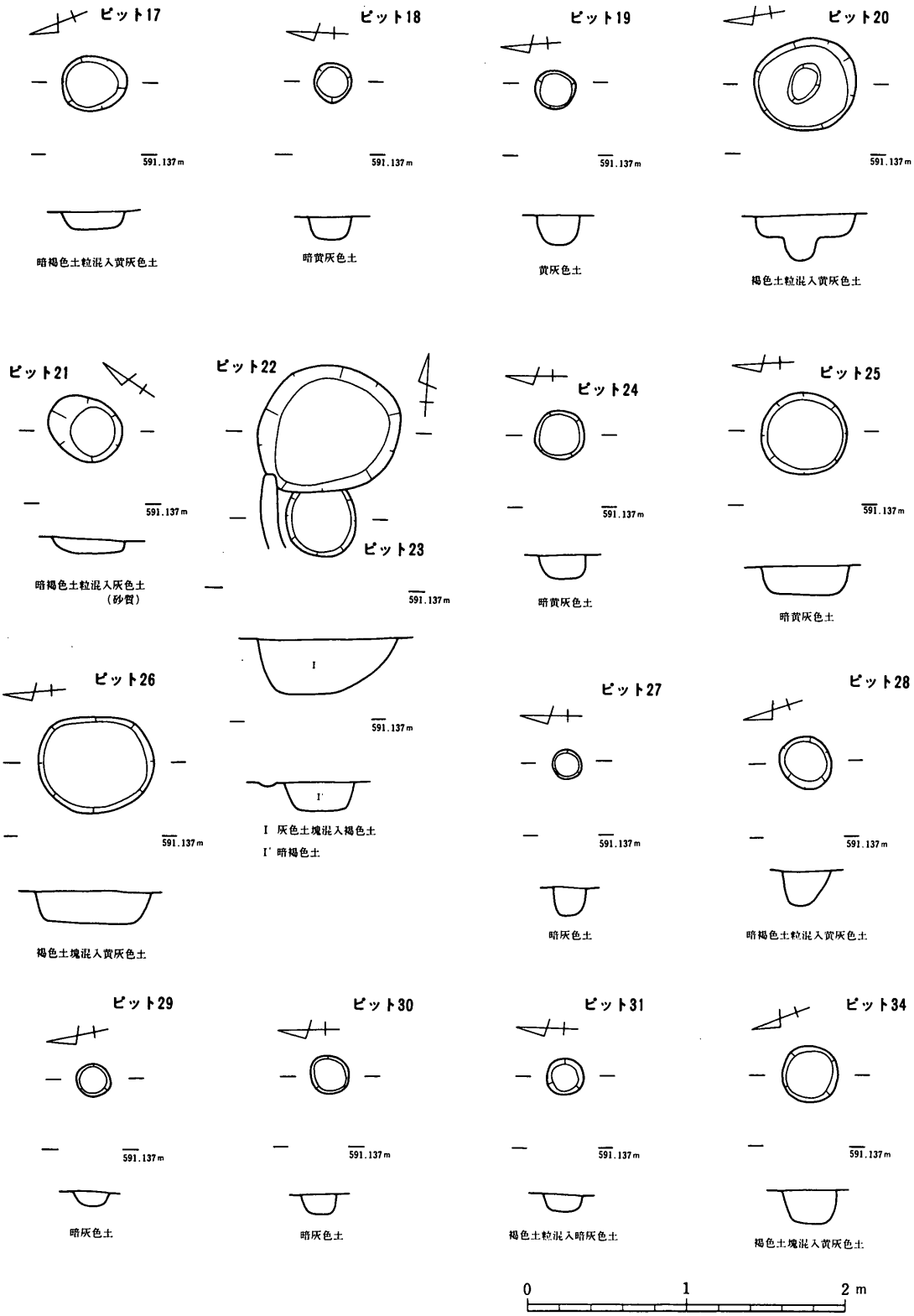
第14図　土　壙 (1)


土壙 3
土壙 6
土壙 7
A
A'
B
B'
591.137m
黄灰色土粒混入暗褐色土
褐色土粒混入暗褐色土
褐色土粒混入暗黄灰色土
0
1
2 m

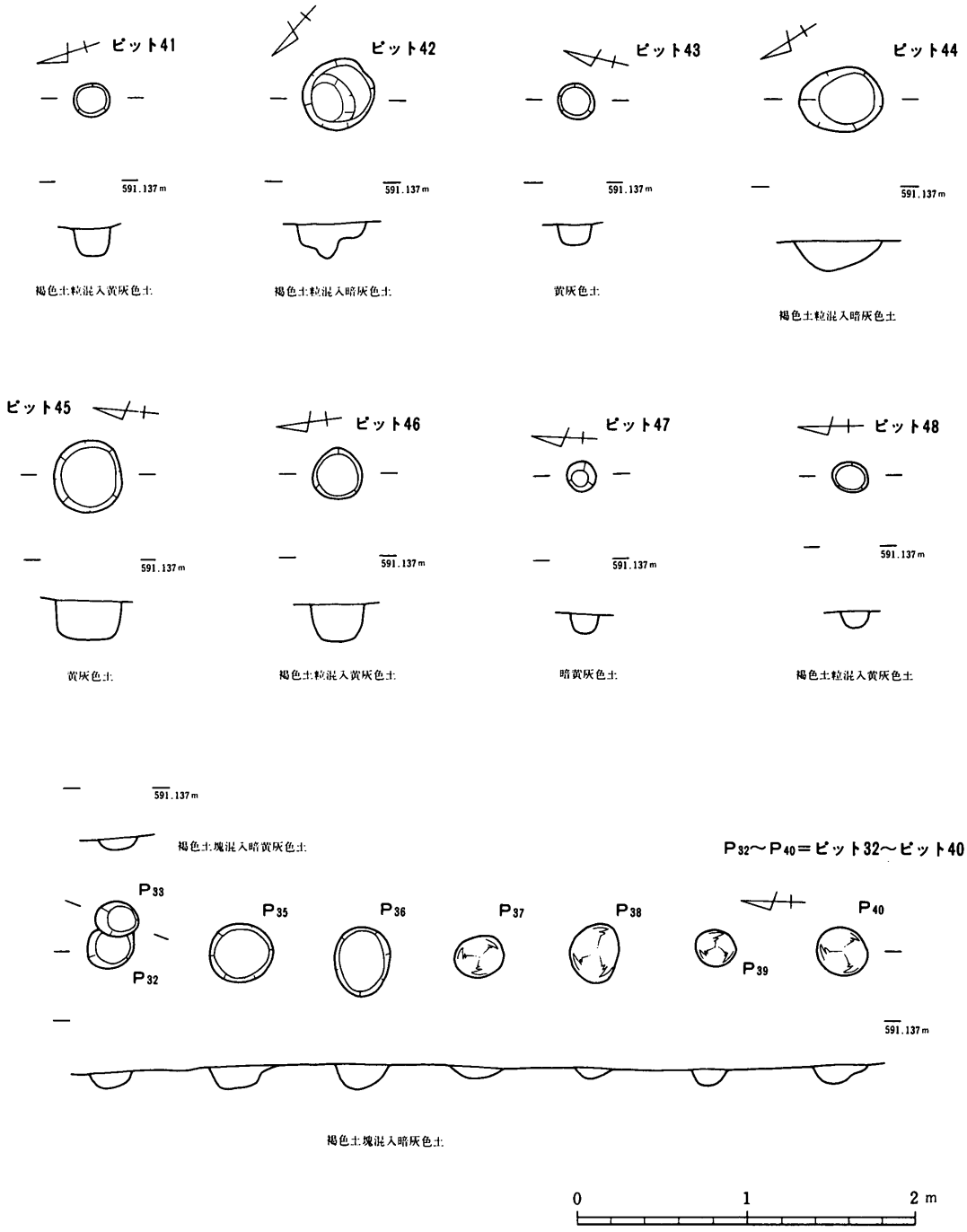
第15図　土　壙 (2)


ピット1
591.137m
黄灰色土粒混入暗褐色土
ピット2
591.137m
黄灰色土（砂質）
ピット3
591.137m
暗黄灰色土
ピット4
591.137m
黄灰色土粒混入暗灰色土
ピット5
591.137m
灰色砂
黄灰色土粒混入暗褐色土
ピット6
591.137m
黄灰色土粒混入暗褐色土
ピット7
591.137m
黄灰色土粒混入暗褐色土
ピット8
591.137m
暗褐色土粒混入黄灰色土
ピット9
I
II
591.137m
I 暗褐色土塊少量混入黄灰色土
II 暗褐色土塊多量混入暗灰色土
ピット10
591.137m
黄灰色土塊混入暗褐色土
ピット11
591.137m
黄灰色土
ピット12
591.137m
黄灰色土粒混入暗灰色土
ピット13
591.137m
褐色土塊混入黄灰色土
ピット14
591.137m
暗褐色土塊混入黄灰色土
ピット15
591.137m
暗黄灰色土
ピット16
591.137m
暗黄灰色土
0
1
2 m

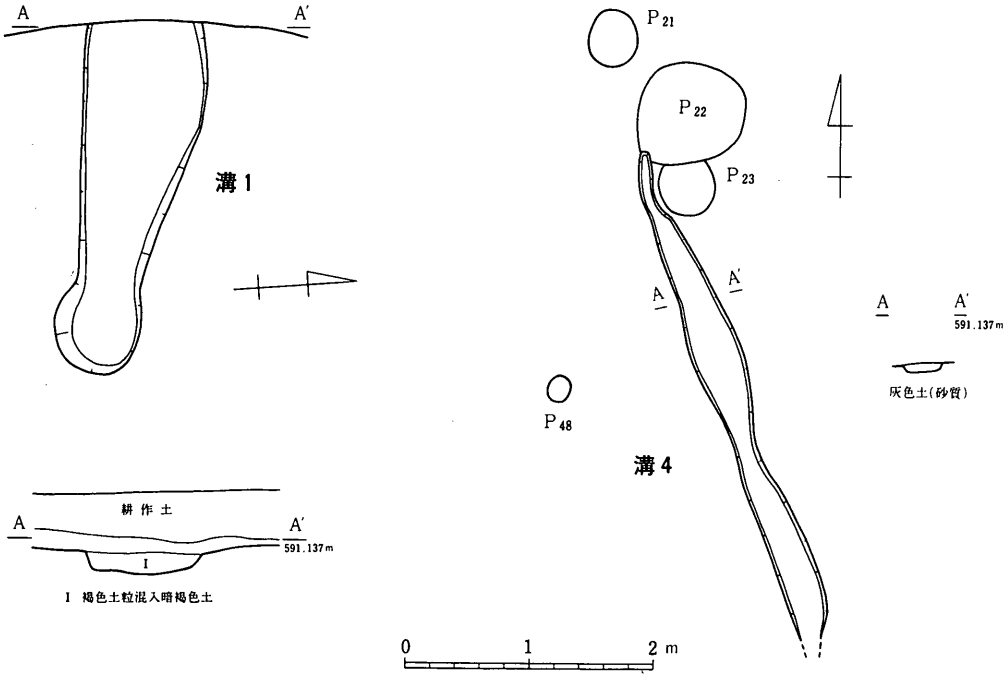
第16図　ピット(1)


ピット17
591.137m
暗褐色土粒混入黄灰色土
ピット18
591.137m
暗黄灰色土
ピット19
591.137m
黄灰色土
ピット20
591.137m
褐色土粒混入黄灰色土
ピット21
591.137m
暗褐色土粒混入灰色土
(砂質)
ピット22
ピット23
591.137m
ピット24
591.137m
暗黄灰色土
ピット25
591.137m
暗黄灰色土
ピット26
591.137m
褐色土塊混入黄灰色土
I
591.137m
I'
I 灰色土塊混入褐色土
I' 暗褐色土
ピット27
591.137m
暗灰色土
ピット28
591.137m
暗褐色土粒混入黄灰色土
ピット29
591.137m
暗灰色土
ピット30
591.137m
暗灰色土
ピット31
591.137m
褐色土粒混入暗灰色土
ピット34
591.137m
褐色土塊混入黄灰色土
0
1
2 m

第17図　ピット(2)


ピット41
591.137m
褐色土粒混入黄灰色土
ピット42
591.137m
褐色土粒混入暗灰色土
ピット43
591.137m
黄灰色土
ピット44
591.137m
褐色土粒混入暗灰色土
ピット45
591.137m
黄灰色土
ピット46
591.137m
褐色土粒混入黄灰色土
ピット47
591.137m
暗黄灰色土
ピット48
591.137m
褐色土粒混入黄灰色土
591.137m
褐色土塊混入暗黄灰色土
P32～P40＝ピット32～ピット40
P33
P32
P35
P36
P37
P38
P39
P40
591.137m
褐色土塊混入暗灰色土
0
1
2 m

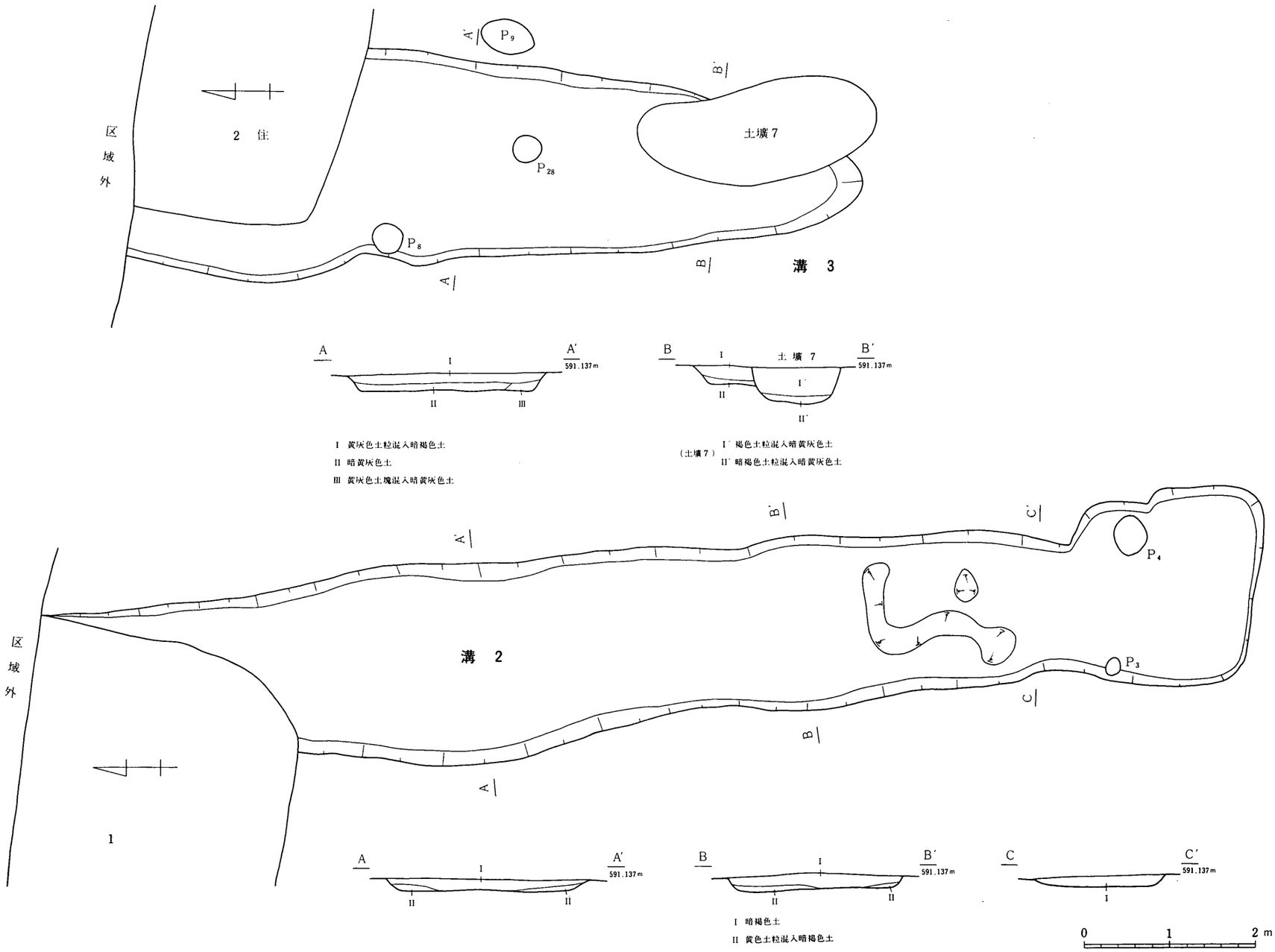
第18図　ピット(3)



第19図　溝(1)

5）溝

今回の発掘調査で検出された溝は4本である。溝1は発掘区の南西隅に位置している。幅52～100cm、深さ16～26cmで、底面では西から東へ低く傾斜している。発掘区域外にかかるため規模は不明である。覆土は褐色土粒混入暗褐色土である。溝2は発掘区の西側に位置し、第1号住居址よりも古い。また、暗褐色土の覆土中にはピット3・4が検出されている。規模は幅150～238cm、深さ18cm前後で14.2m程のびながら発掘区域外に続いている。底面は幅広でわずかに南から北へ低く傾斜し、壁は斜めに立ち上がっている。溝3は溝2の西側約2.7mに位置し、第2号住居址、土壙7、ピット8・28よりも古い。規模は幅230cm前後、深さ25cm前後で8.5m程のびながら発掘区域外に続いている。覆土の上層は黄灰色土粒混入暗褐色土で溝2の覆土に類似している。底面は幅広でわずかに南から北へ低く傾斜している。溝4は発掘区の東南隅に位置し、ピット22よりも新しい。規模は幅18～41cmで、検出面からの深さは4～8cmと浅い。覆土の灰色土は砂質で堅くしまっており、底面では鉄分の集積もいくぶんみられたので、かつては水が流れていたと考えられる。底面ではわずかに北から南へ低く傾斜している。遺物は溝1・2から土師器の破片が少量出土しているだけである。溝の時期については、住居址の時期から、溝2がXIII期以前、溝3はIII～IV期以前と考えることができる。また、溝1については発掘区西壁の土層断面観察からIII層（III′層下)の途中から掘り込まれているので、第1発掘面のなかでは比較的古いと考える。


区域外
2 住
P9
P28
P8
土壙7
溝 3
A
A'
B
B'
591.137m
I 黄灰色土粒混入暗褐色土
II 暗黄灰色土
III 黄灰色土塊混入暗黄灰色土
(土壙7) I' 褐色土粒混入暗黄灰色土
II' 暗褐色土粒混入暗黄灰色土
溝 2
C
C'
P4
P3
1
I 暗褐色土
II 黄色土粒混入暗褐色土
0 1 2 m

第20図 溝 (2)

2　第2発掘面

1）土壙・ピット

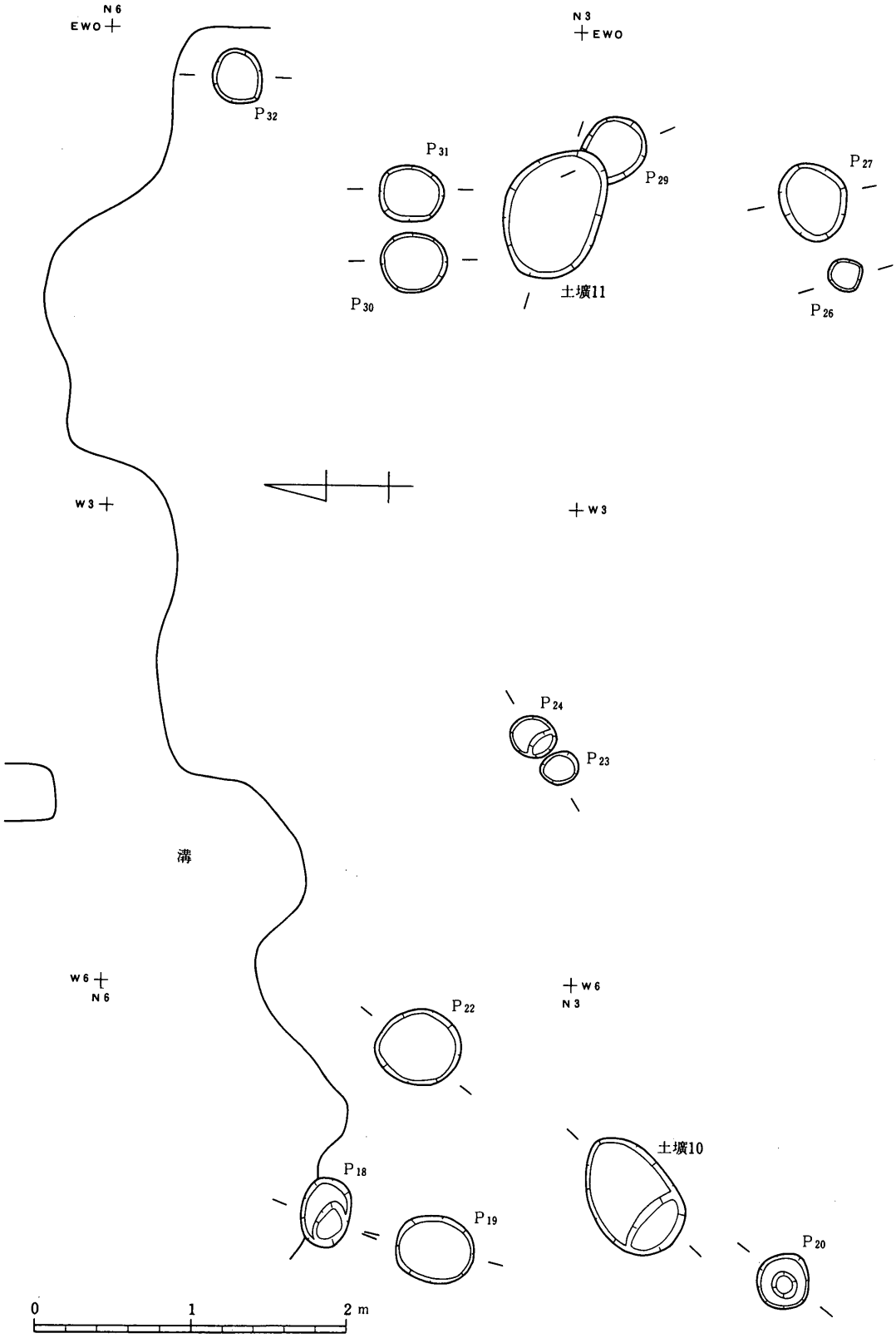
第2発掘面で検出された遺構は土壙・ピットと溝だけである。土壙とピットの基準については第1発掘面と同じであるが、発掘調査で使用した名称・番号をそのまま踏襲しているため、一部1m未満の穴を土壙として扱っている。

第2発掘面で検出された土壙は14基、ピットは82基である。分布をみると土壙・ピットは発掘区の東半に集中している。特に発掘区の西側から東へ流れる2本の溝（自然流路）にはさまれた地区と、発掘区の北東部分の地区に集中している。これらの土壙・ピットは建物址・竪穴式住居址などの遺構と結び付けることはできなかった。検出面からの覆土の厚さは浅く、多くは単層である。しかしながら、第1発掘面から第2発掘面まで重機を使用して掘り下げたときの観察では、実際はもう少し高いところから掘り込まれていた。おそらくは礫を多量に混入する黒褐色土層（Ⅶ層）の堆積が進行していたときか、それ以後に掘り込まれたものと考えたい。

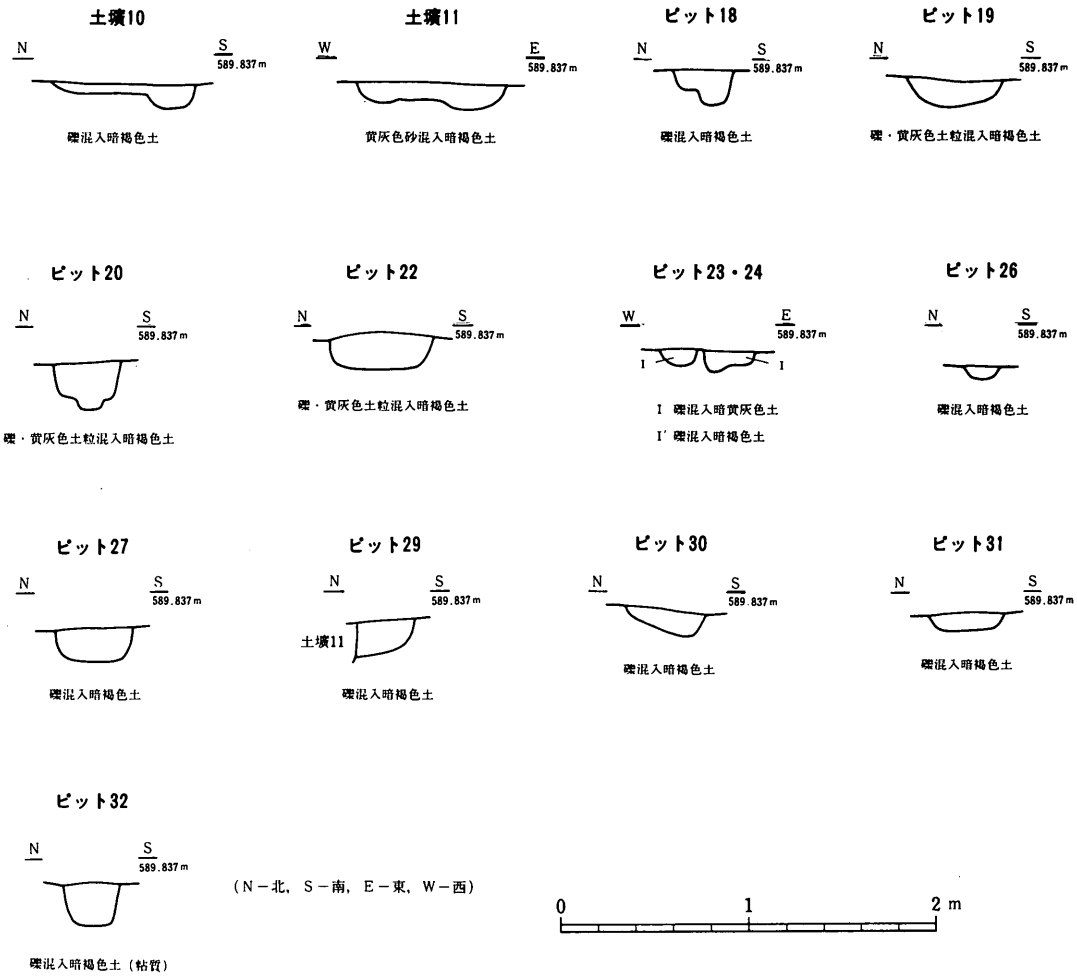
土壙は黄灰色土の覆土をもつものと暗褐色土の覆土をもつものがある。特に後者の土壙は礫を混入している場合が多い。これらのうち特徴的な土壙について述べる。土壙5は発掘区の北東に位置している。規模は112×63×14cmの不整楕円の土壙であるが、底面の北寄りに直径27cm、深さ12cmのピット状のくぼみを伴っている。土壙6・7は発掘区の北東端に位置し、自然流路の溝よりも古いものである。第2発掘面のなかでは大形の土壙である。土壙7は底面の凹凸が激しく、人為でなく自然の土壙であると思われる。土壙6は発掘区域外にかかるのと溝に切られているが、方形または楕円形を呈すると思われる大形の土壙である。本址の覆土からは土器片1点が出土しているが時期は不明である。土壙9・14はともに平面形が円形を呈するものだが、底面の中央が2段底になっているものである。覆土はともに礫を混入する暗褐色土で、柱痕等は確認できなかった。

ピットは土壙と同様に黄灰色土の覆土をもつものと暗褐色土の覆土をもつものがある。前者は発掘区の中央にある溝の南半に多く、後者は北半に多く分布している。後者の場合は覆土に礫を混入しているものが大半である。発掘区の北半は溝の影響で礫を被っているところが多いことから、ピットの覆土内の礫は溝に原因するものと考えたい。

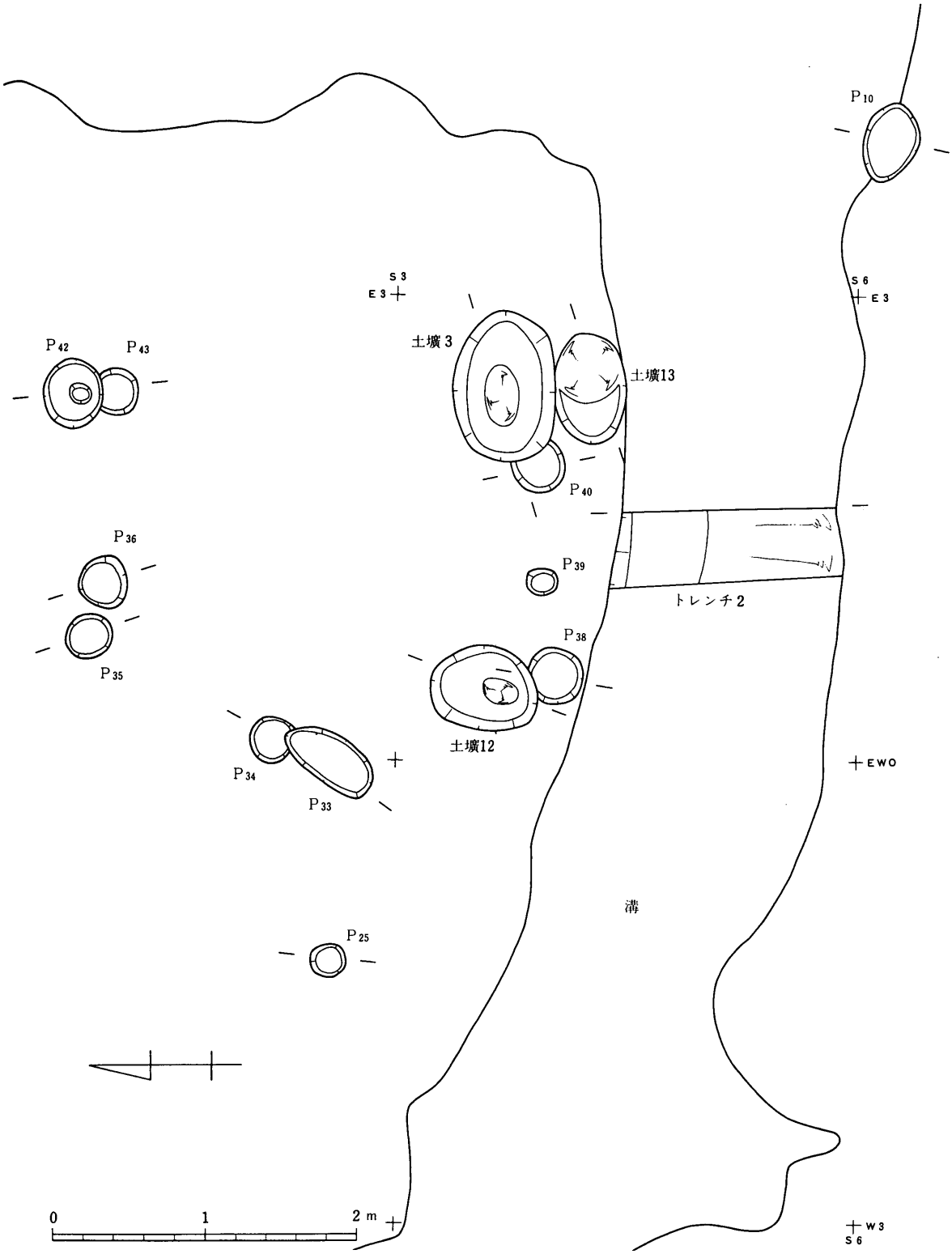
土壙・ピットの時期については土壙6を除いて出土遺物がないため確定できない。今回の調査では、これらはⅦ層から掘り込まれていたと考えられることと、第2発掘面下のⅩ層で縄文土器片が出土していること、検出面からは縄文時代中期～晩期の土器破片が出土していることから縄文時代から古墳時代前期までの広い範囲でしか捉えることができなかった。



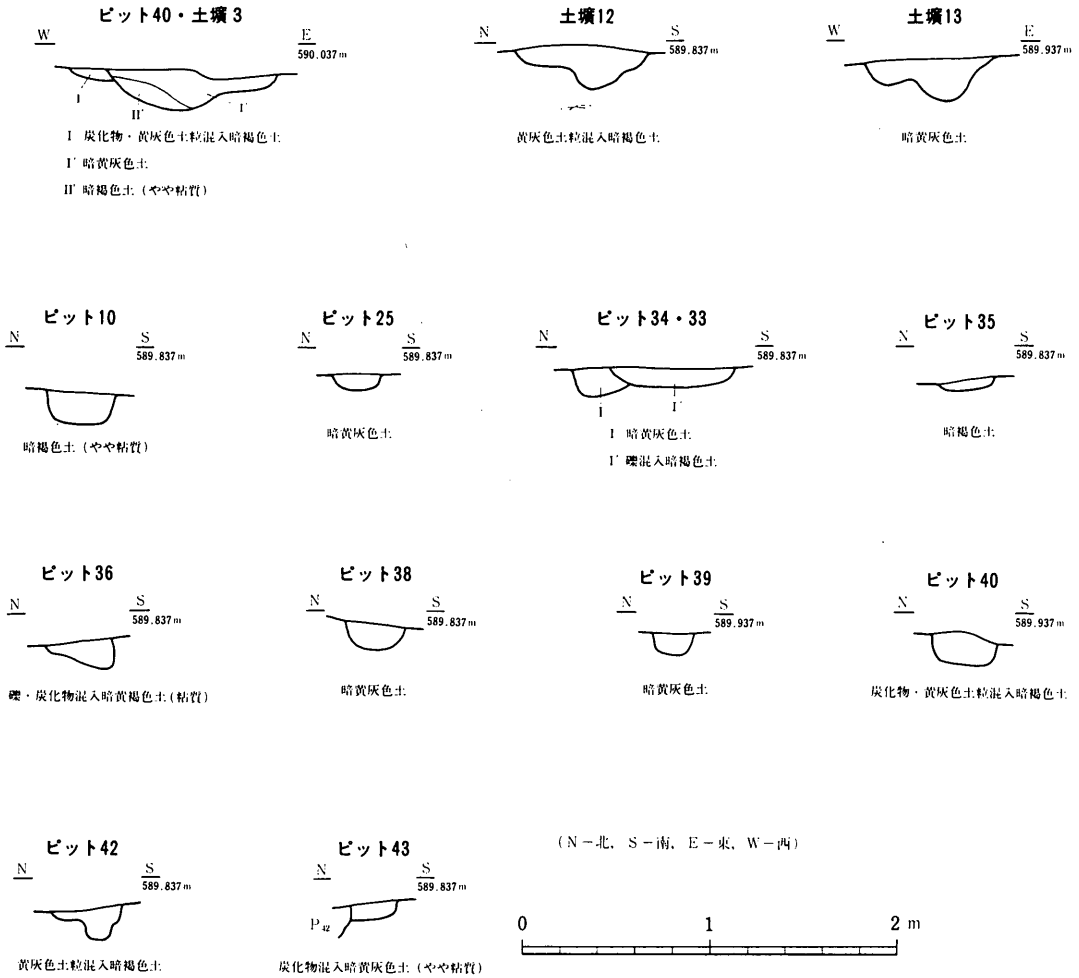
第21図　土壙・ピット群(1)



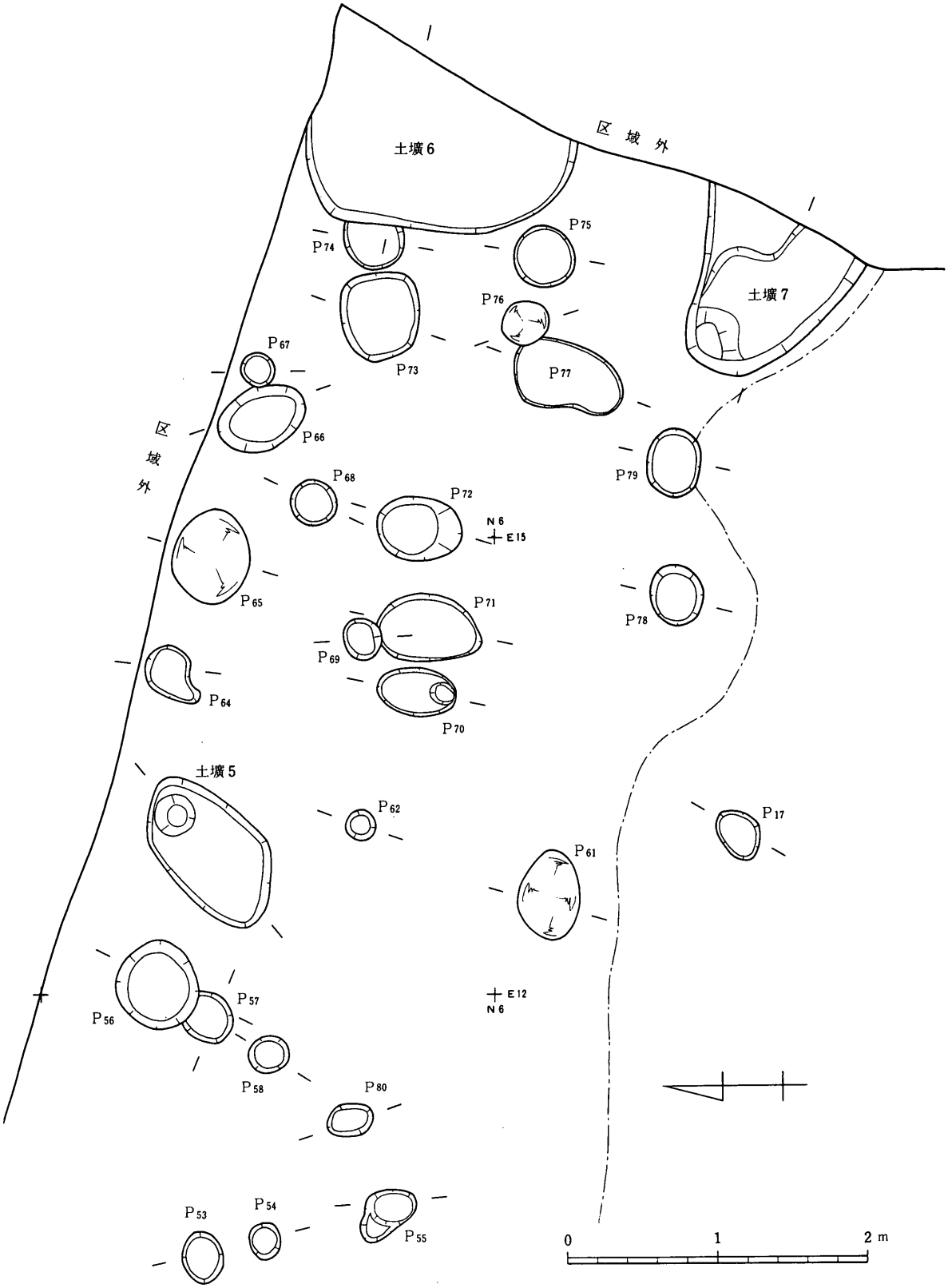
第22図　土壙・ピット群(2)



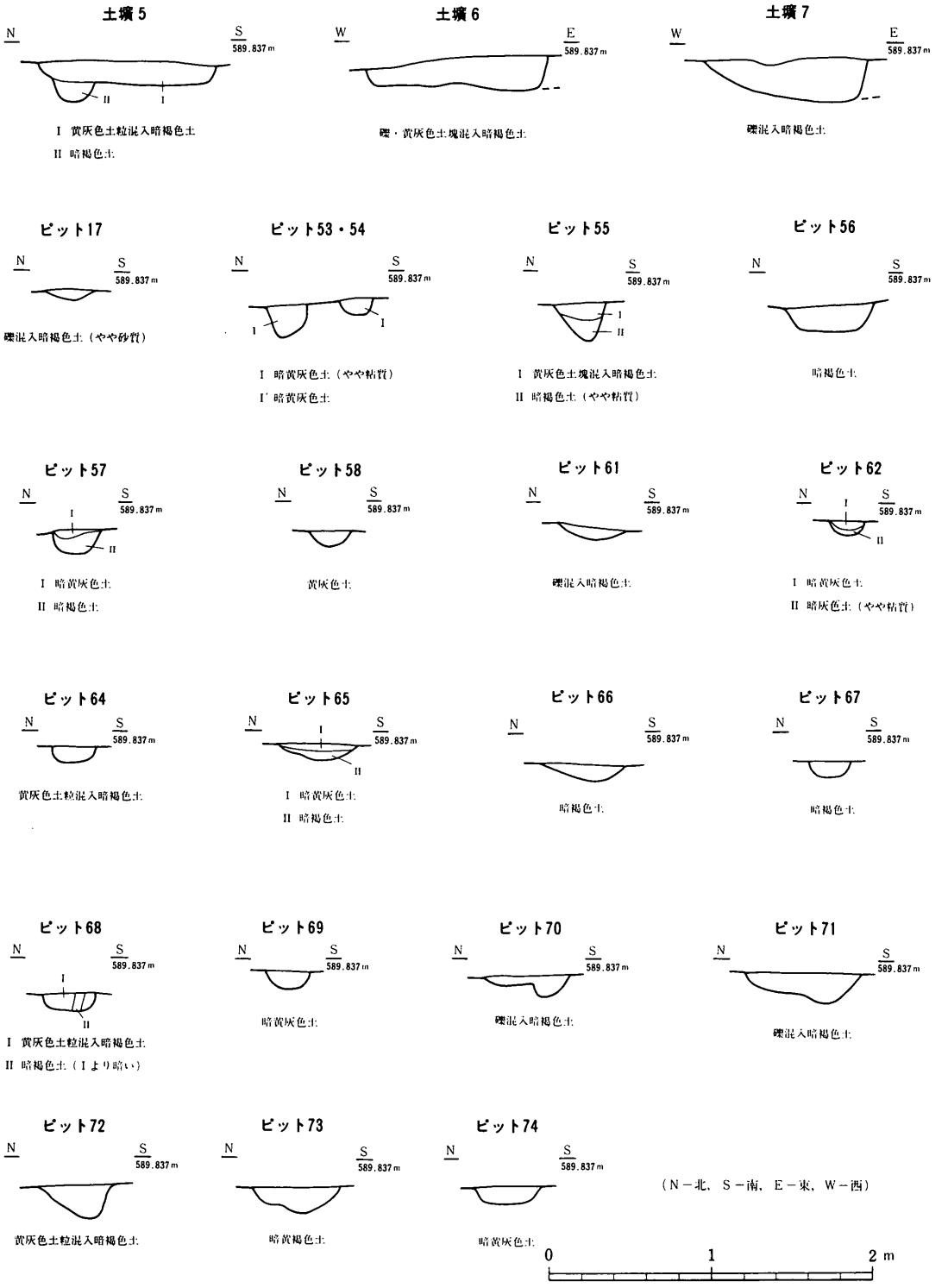
第23図　土壙・ピット群(3)



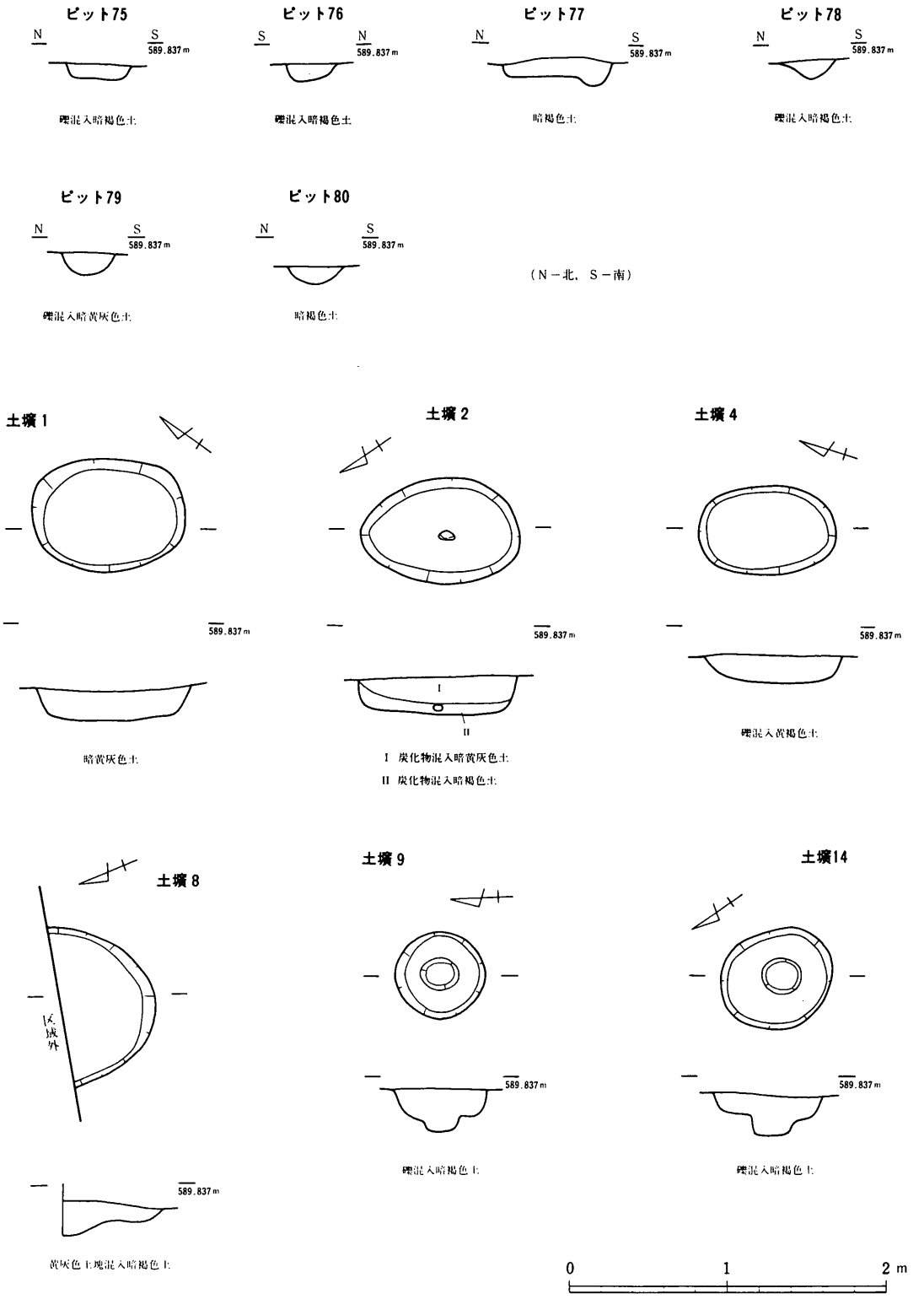
第24図　土壙・ピット群(4)



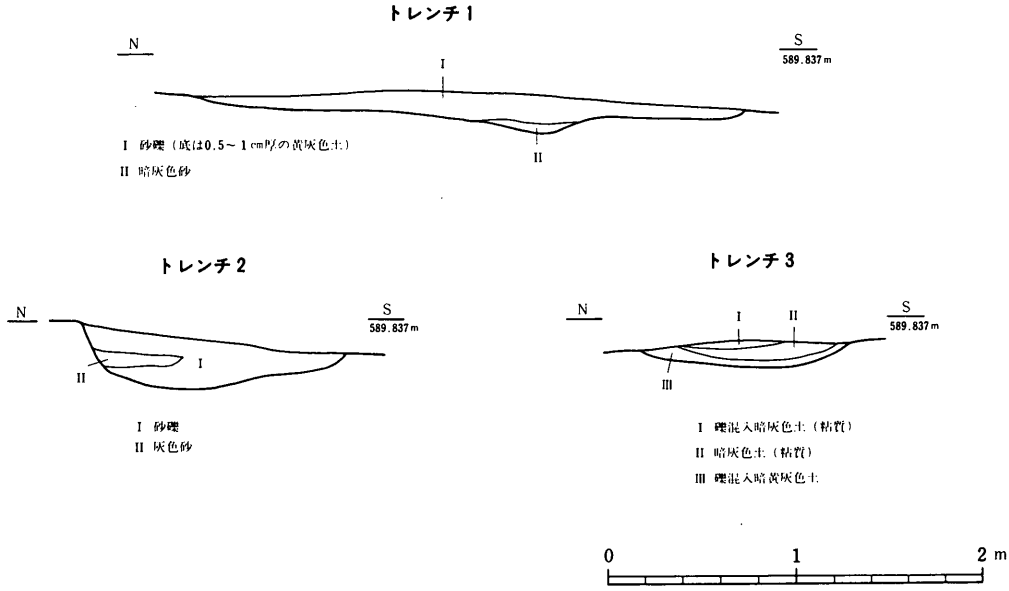
第25図　土壙・ピット群(5)



第26図　土壙・ピット群(6)



第27図　土壙・ピット群(7)，土壙(3)



第28図　溝 (3)

2）溝

第2発掘面で検出された溝はすべて自然流路と考えられる。複数の溝が検出されたが、番号を付けて区別することはしなかった。

主な溝としては発掘区の中央を西から東へのびる溝（幅1.4～2.0m）と、発掘区の北西からのびながら途中で前述の溝と合流する溝（1.2～2.4m）の2本がある。合流した後は幅2.8～4.5mで発掘区の東端にのびている。これらは西側では溝の輪郭が明確につかめず、砂礫が不整形に広がった様相を呈している。また、2本の溝が合流する地点から別の溝が北側を並行しながら東へのび、発掘区の東端で北側へ流れを変えている。この溝の東側では礫のかぶりがみられ、そのなかから破損部が摩滅している縄文時代後期の土器片を採集している。これらの溝については数か所で溝の底のレベルを確認したのと、4箇所にトレンチを設定して、土層の堆積状況を確認したにとどめた。

その結果、これらの溝については西から東へ低く流れている自然流路であることを確認した。トレンチ1・2は発掘区の中央にのびる溝に設定した。溝の覆土はいずれも砂礫で底や覆土の途中に灰色砂が少量堆積している。底面では鉄分の集積は全くみられなかった。トレンチ3は2本の溝の合流点から東へのびる溝に設定した。溝の覆土は上・中層が粘質の暗灰色土、下層が礫を混入する暗黄灰色土で、前述の溝の覆土とは若干様相を異にしている。

第3節　遺　　物

1　土器

各遺構内および各検出面から出土しているが量は少ない。時期的には、縄文時代から平安時代にかけてと多岐にわたる。遺存状態は非常に悪く、摩滅の進んだ小破片がほとんどで、図化提示できたものは実測12点、拓影4点のみである。量的な少なさ、遺存度の悪さから、土器群として把握していくことは難しいので、図示したものを中心に時期的な問題に触れてみたい。尚、器種・器形の呼称に関しては、古墳時代末から平安時代のものについては文献1・2等に従い、他のものは従来一般でおこなわれているものを用いる。

①図示提示できたもの

1～3は第1号住居址出土品で、いずれも土師器である。1が皿、2が高台をもつ皿、3が羽釜で鍔が全周せず部分的につくものになる。1・2はロクロが用いられており、1の底面にはハケメ状の強い擦痕がある。これらは平安時代後半11世紀以降の土器と考えられている。

4～6は第2号住居址出土品で、4が小形甕、5・6が甕、いずれも土師器である。4は外面が二次焼成を受けて落剝し調整不明だが、内面は横のミガキが施される非ロクロの珍しいものである。5・6はいずれも最大径が口縁端部にある非常に胴の長いもので、5は外面に縦のハケメ、内面は下部に僅かに横のハケメの他はまばらな縦のハケメが行われている。6は胴部の外面に縦のハケメ、口縁の内面と胴下部に横のハケメが施されて、それ以外の内面は縦方向の長いナデが行われる。この5・6の甕は、古墳時代末の甕Aから平安時代の甕Eへの変化を窺うのに良好な資料で、奈良時代の中頃に位置付けられるものと考える。

7・8は建物址1から出土した須恵器の坏で、8の底面には静止糸切りあるいは太いハケメ状の跡が見える。両者とも体部に比較的丸味があり、奈良時代の中頃から後半にかけてのものとみたい。

9は第1発掘面土壙4出土の土師器の小形の壺あるいは小形丸底坩になると思われるものである。内外面ともナデで、あまり丁寧に作られていない。古墳時代前・中期に比定される。

10は第1発掘面P_1出土の底面に回転糸切り痕をもつ土師器の小形甕である。奈良時代の後半から平安時代の前半に比定される。

11はⅥ・Ⅶ層中から出土した土師器の壺の口縁である。器面は著しく摩滅するが、二重口縁の特徴的な形態から、古墳時代前期に属するものであることが分かる。

12は第1発掘面の検出面から出土した土師器高坏の脚上部である。摩滅が進んで詳細は不明だが、僅かに残った坏部内面が黒色を呈しているようなので古墳時代後期のものと考えられる。

13～15は第2発掘面から出土した縄文土器の拓影である。13は棒状施文具で横方向の文様を描き、14は同様の沈線で2本の垂線とその両側に波状懸垂を配している。縄文中期末の所産と考える。15

は2本の並行する隆帯によって文様が構成されるもので、縄文中期後葉のものであろう。16は薄手で半隆起線と丸い刺突が組み合さる特徴的な文様から、縄文後期前半の深鉢の一部と推定される。

②図示不能なもの

第1発掘面から遺構・出土地点別に概観してみたい。

第2号住居址からは図示したもののほか、厚手で雑な調整をもつ破片が出土しており、甕・小形甕Dになるとみられる。

第3号住居址からは器形のわかりにくい小破片ばかり出土したが、これらのうちには奈良時代位に比定される外面に弱いハケメをもつ甕A(新段階のもの)あるいは甕Eの古手のものが混じっており、第2号住居址に近い時期を示している。しかし赤彩される高坏や大形壺の胴部等の弥生時代後期から古墳時代前期にあたる小片も少量みられる。

建物址1からは図示したもののほか、甕と思われる土師器の小片が出土している。建物址2からは小形甕Cの一部とみられる内外面にハケメをもった土師器の小片、甕と思われる厚手の土師器の小片が出ている。これらは第2号住居址からのものと近い時期にあると考える。

第1発掘面の溝1からは土師器の薄手の小形甕片、溝2からは外面にケズリのあるやや厚手の土師器の甕片が出土している。前者を小形甕Gとみるなら奈良時代の終りから平安時代の前期前半、後者を甕Dとみるなら奈良時代の前半から後半に位置する。

第1発掘面の土壙7からは土師器の厚手の甕口縁の一部や甕Eの小片などが出土しており、概ね奈良時代のものと考えている。同じくP_{11}からは外面にハケメをもった厚手の土師器甕AまたはE片、P_{16}からは厚手の大形壺破片が得られており、前者は奈良時代でよいが、他は古墳時代前期以前に遡ってしまう。

竪穴状遺構からは薄手の土師器の小片が出ているが、器種の判別ができない。

第1発掘面の検出面から得られたものは、すべて小破片であるが、土師器坏A、土師器小形甕Cあるいは小形の甕、底部際から胴部が大きく張り出す土師器壺、等の器形が判別できる。古墳時代末から奈良時代と、古墳時代前期に比定が可能である。

第2発掘面の遺構からの出土量は極めて少ない。土壙6からは薄手の土師器質のものが出土しているが、種別・器種ともに不明である。溝からは外面に太いハケメ状の調整をもつ土師器質の小片が出たが甕である可能性を指摘できる程度である。

第2発掘面の検出面からは、明らかに縄文土器とわかるものが図示したものを除いて2片出土しているが、他は、土師器である可能性が高いと言う程度のものばかりで、明確な時期を提示できない。このほか検出面上に焼土のみあった場所があり、その周辺から数点出土した破片のなかに、時期のわかるものとして外面に条痕、内面にケズリをもつ縄文時代晩期末葉の深鉢片が1点混じっていた。

③遺構・層位と土器の時期

出土土器よりみた遺構あるいは検出面（層位）の時期について再考してみたい。

住居址については、図示できたものがあるところはその説明で触れた通りである。少ない資料のなかで少々危険であるが、従来の島立地区での古墳時代末から平安時代にかけての時期区分を当てはめてみると、第1号住居址はⅩⅢ期、第2号住居址はⅣ期に相当するとみたい。第3号住居址は土師器甕破片の状況から第2号住居址に近い時期と推定する。

建物址1は図示した須恵器坏からみると、Ⅳ期が妥当なところであろう。建物址2はやはり土師器甕破片の状況からみて第2号住居址に近い時期と考えている。

第1発掘面上から発見された遺構の出土品は、概して奈良時代のものに中心がある。細かくみると古墳時代末より平安時代前半の間に属するもののなかに、若干の古墳時代前期を中心とするものが混じる様相を呈す。検出面からの出土品も同様の傾向がある。

第1発掘面と第2発掘面の間の層中からは古墳時代前期のものが出ており、上述のように第1発掘面で少量伴った同期のものは、あるいはここに由来するのかもしれない。

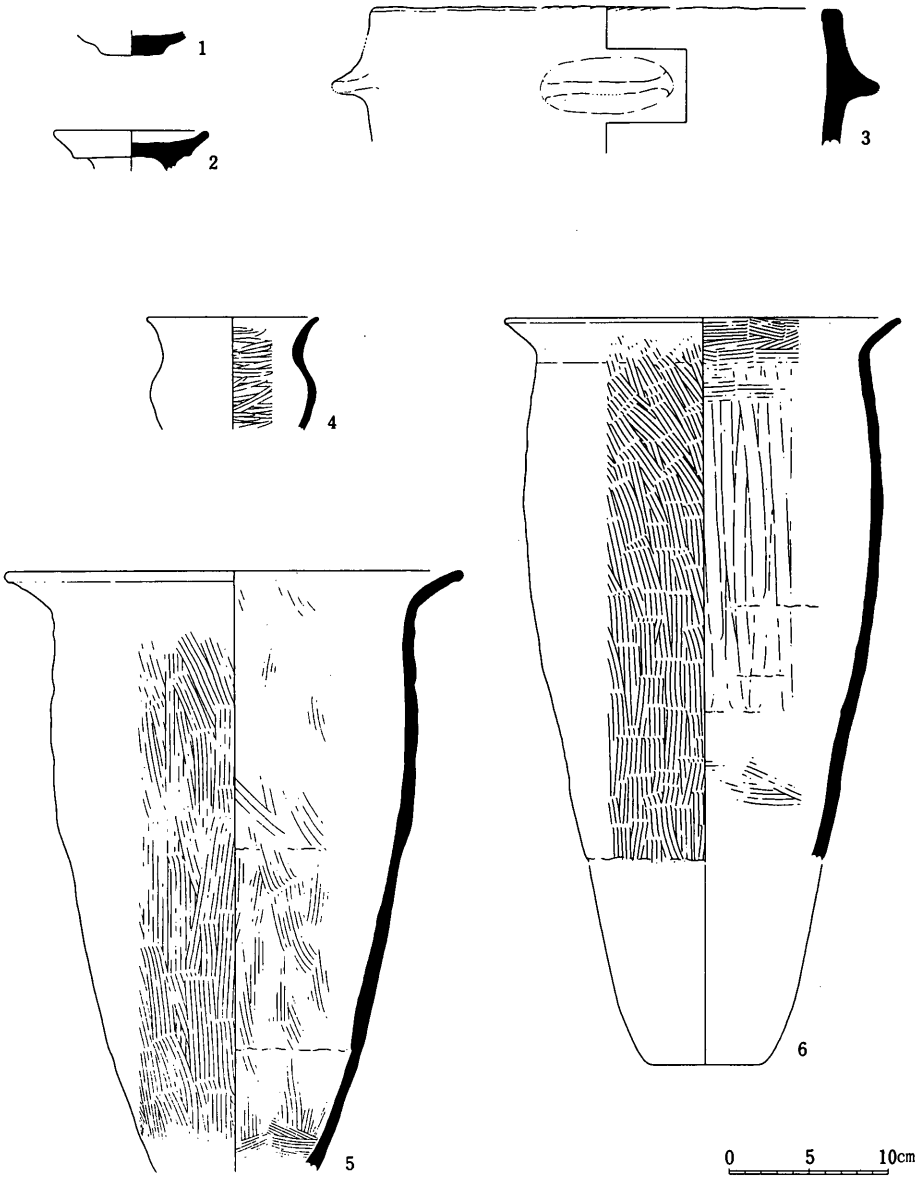
第2発掘面からの出土品の大きな特徴は、縄文時代中期後半以降の縄文土器が伴うことで、摩滅して種別・器種不明の小片のなかにもまだ縄文土器があるとみたほうがよい。しかし縄文土器よりやや薄手の破片もあり、明確な証拠は挙げられないが弥生時代まで時期の下るものもあろう。

全体的にみて今回の調査地点における層位と遺構および土器の時期は、第1発掘面が古墳時代末から平安時代後半、第1発掘面と第2発掘面の間、Ⅵ・Ⅶ層周辺が古墳時代前期、第2発掘面が縄文時代中期から晩期（もう少し下る可能性もある）に位置付けられる。

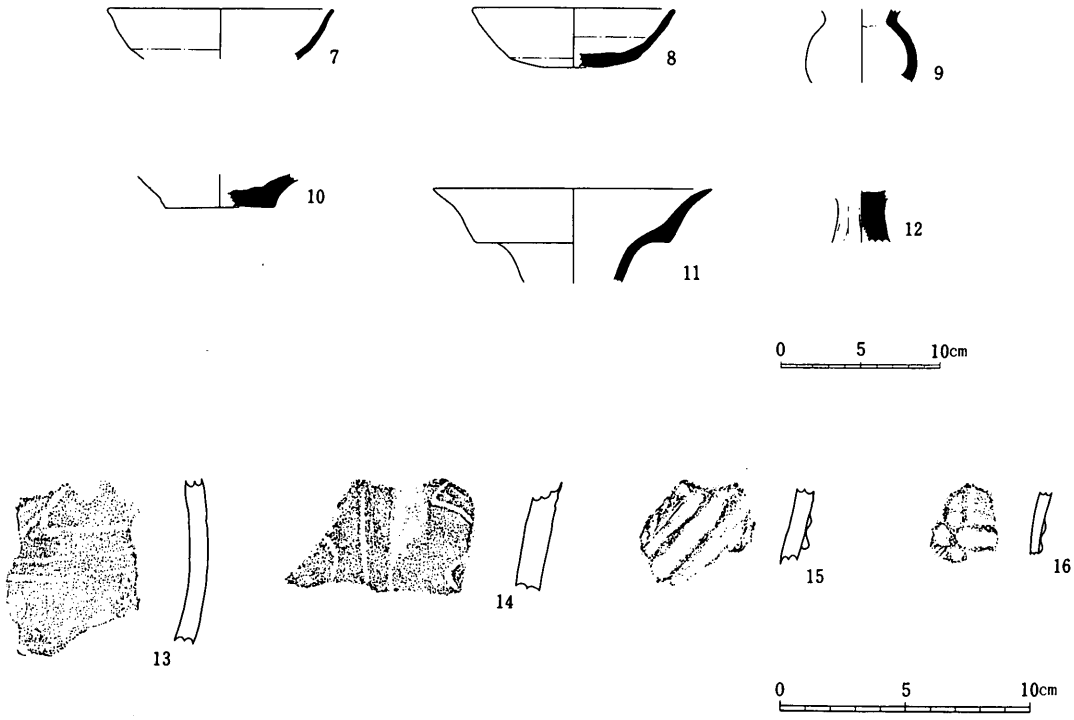
参考文献

1　松本市教育委員会　1986　『松本市島立南栗遺跡』

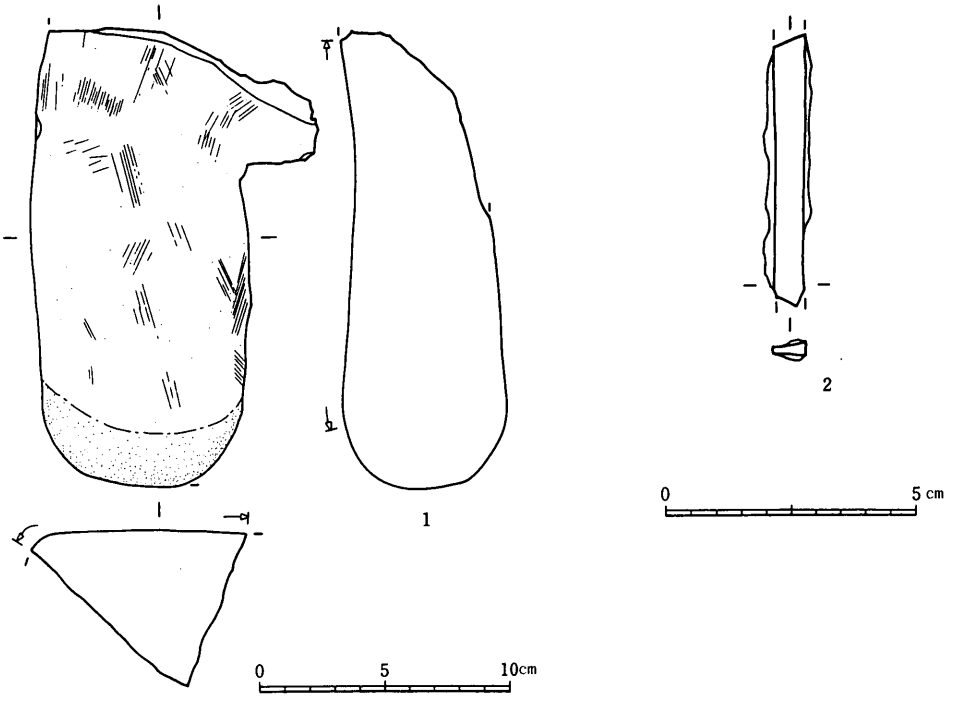
2　松本市教育委員会　1987　『松本市島立北栗遺跡、条里的遺構』



第29図　出土土器(1)



第30図　出土土器(2)



第31図　出土石器・鉄器

2　石器・鉄器

今回の調査では石器・鉄器がそれぞれ1点出土している。

1は砥石である。第1号住居址の床面から出土したものである。破損しているので本来の大きさは不明だが、現存の寸法は最大長13.85cm、最大幅11.35cm、最大厚5.65cm、重量1550gである。砥石の素材となったのは偏平な砂岩礫である。砥面は凹形の1面のみである。かなり使用されたらしく磨面は平滑になっており、使用範囲はやや暗色を呈している。大きさ、石材からいえば置き砥石で荒砥に使われたと考えたい。

2は刀子と考えている。第2号住居址出土であるが、覆土からの出土であるので、本址に属するものか特定できなかった。刃部を失っているが、刀子の茎部と考えられ、現存の寸法は最大長5.35cm、最大幅0.94cm、最大厚0.52cm（錆びの部分を含む）、重量5.15gである。

このほかに、図示はしていないが第2発掘面の検出面で磨石の可能性がある梓川系の安山岩の円礫を採集している。最大長8.05cm、最大幅7.90cm、最大厚5.05cm、重量361gで下面がわずかに磨かれて変色をしていると考えている。

第4章　調査のまとめ

一般に、島立地区の奈良井川西岸に分布する三の宮遺跡から南栗遺跡の東限は、奈良井川の段丘崖の縁辺になると考えられている。また、南栗・北栗地籍では段丘崖上の地下から縄文時代中・後期の土器・石器が採集されている。今回の発掘調査地は北栗遺跡の中では北寄りであるが、前述の段丘崖の縁辺に位置している。そこで、北栗遺跡の東限と時代の上限を確認することを目的に調査を行った。

発掘の結果は、第1発掘面で竪穴式住居址3軒、建物址2棟、竪穴状遺構3基、溝4本、土壙・ピット55基を検出することができた。遺物は須恵器・土師器・砥石・鉄器が遺構にともなって出土している。遺構の時期は奈良時代中頃から平安時代の後半にわたるものである。第2発掘面では自然流路の溝のほか土壙・ピット96基を検出することができた。遺構からの遺物の出土はほとんどなかったが、検出面・グリッドから縄文時代中～晩期の土器片が出土している。また、第1・2発掘面の間層からは古墳時代前・中期の土師器を検出している。さらに、本調査地の西側100m をグランド造成にともなって発掘した結果、古墳時代末から平安時代後期の集落を検出している。

上記のことを基に、今回の発掘調査の成果を次のとおり位置づけたい。

1．　北栗遺跡の東限の再確認。

2．　発掘地周辺が縄文時代中期から平安時代後期まで連綿と居住地として利用されてきた可能性があること。(今回の調査では弥生時代の遺物は確認できてはいない。)

3．　本格的に集落が発達するのは古墳時代末以降だと考えられること。

4．　式内社である沙田神社に隣接する地域での平安時代集落の確認。

5．　土層の堆積状況を確認できたこと。(土層は暗褐色土と暗黄灰色土のセットが3面以上あり、それぞれの暗黄灰色土で遺構の検出が行えるものと考えている。)

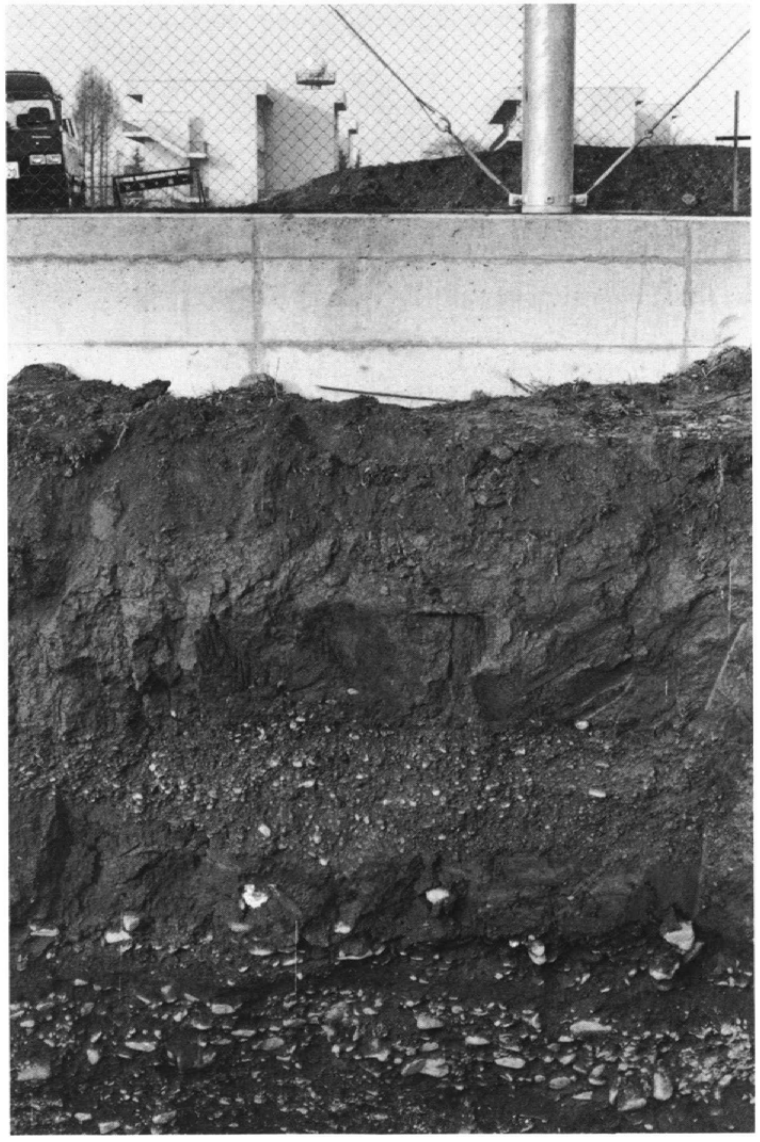
なお、北栗遺跡は奈良井川の段丘崖に沿って南を南栗遺跡に、北を三の宮遺跡に接している。しかし、これらは最近の調査では個々の遺跡として捉えるのではなくある年代幅と地域をもった巨大な集落遺跡として考えた方がよいと思われる。従来からの遺跡の範囲・名称等については再検討しなければならない時期にきている。

最後に、今回の調査に当たり島立小学校、島立公民館・出張所の方々には多大なるご協力をいただきました。また、12月から1月初旬の寒気のなか発掘調査が支障なく行うことができましたのは、調査に従事された調査員・作業員の方々のご協力とご理解によるものです。記して感謝の意を申し上げます。

図　　版

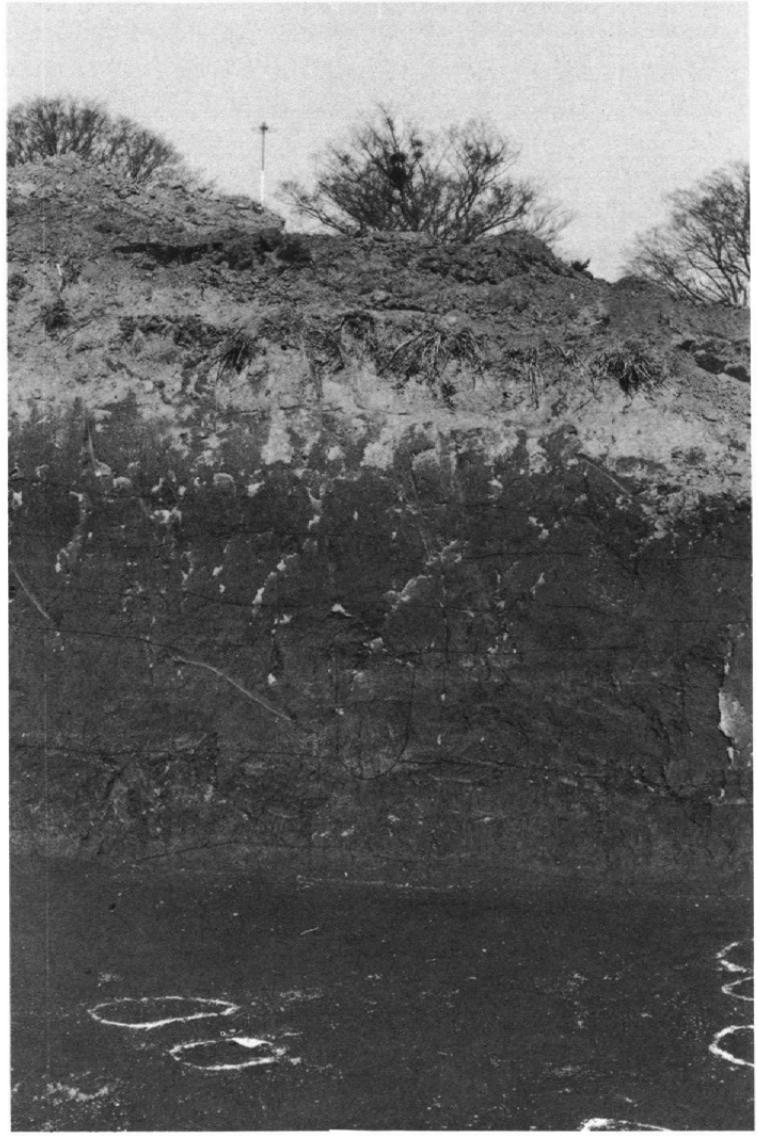
調査地全景（南から）　左側のフェンスは、島立小学校の新設グランドの東側を区画するもの。遠景のケヤキは沙田神社の参道の並木である。

検出状況（北から）　右から、竪穴状遺構3，ピット列，建物址1、第3号住居址がみえる。右後方には土壙4・5がみえる。



土層の堆積(1)

調査地の南側で行われた土取りの際に現れた土層。下側の砂礫層は採土壙の底面まで続いている。



土層の堆積(2)

発掘区の北壁（西側から25～27m地点）。Ⅵ層中にピットが掘り込まれている。下面は第2発掘面。

土層の堆積(3)

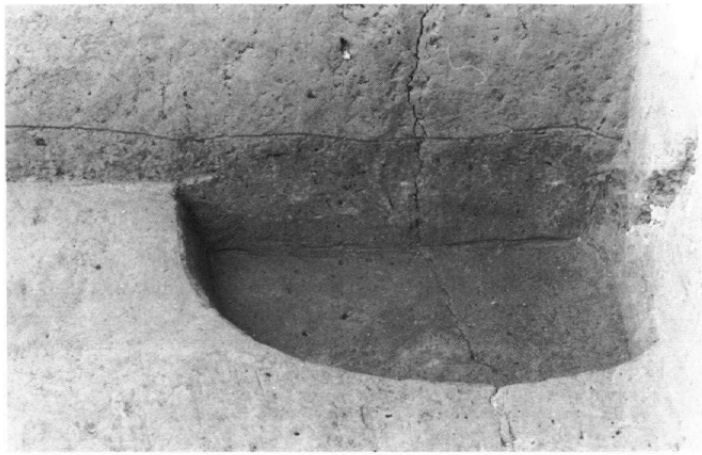
発掘区の西壁。フェンスの向うには島立小学校の校舎がみえる。写真（上）のポールの左側から4本目の直下で、土層に段差が生じているのは、壁土取りのために土地が削平されたためである。壁の下部には礫を多量に包含するⅦ層がみえる。

写真（下）では、Ⅶ層中に、河川のはん濫に起因すると考えられるⅧ層がみえる（写真の白い部分）。

本調査地では、暗褐色土と（暗）黄灰色土が交互に堆積している（第7図参照）。

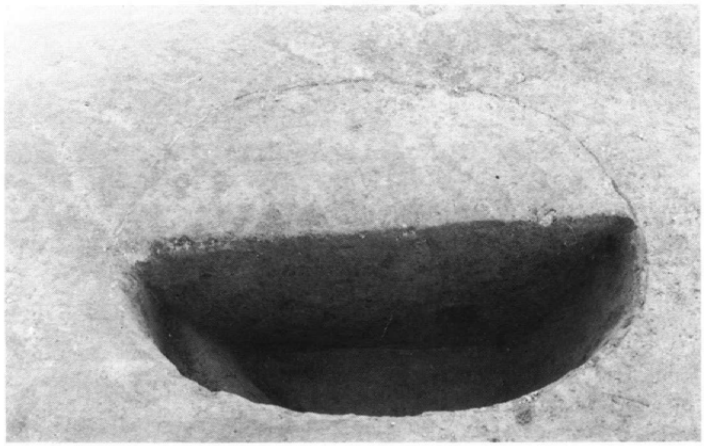
第1号住居址・遺物出土状況（南から）

第1号住居址　右上のP_2の底面からは、高台をもつ皿(2)が出土している。

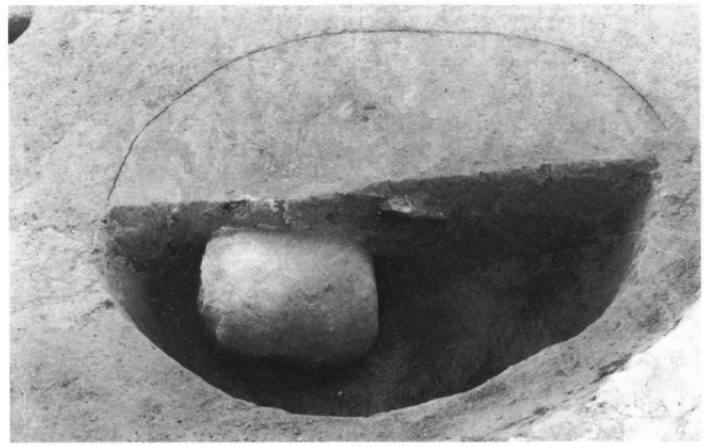


第１号住居址・ピット１

同・ピット２　高台をもつ皿が出土している。



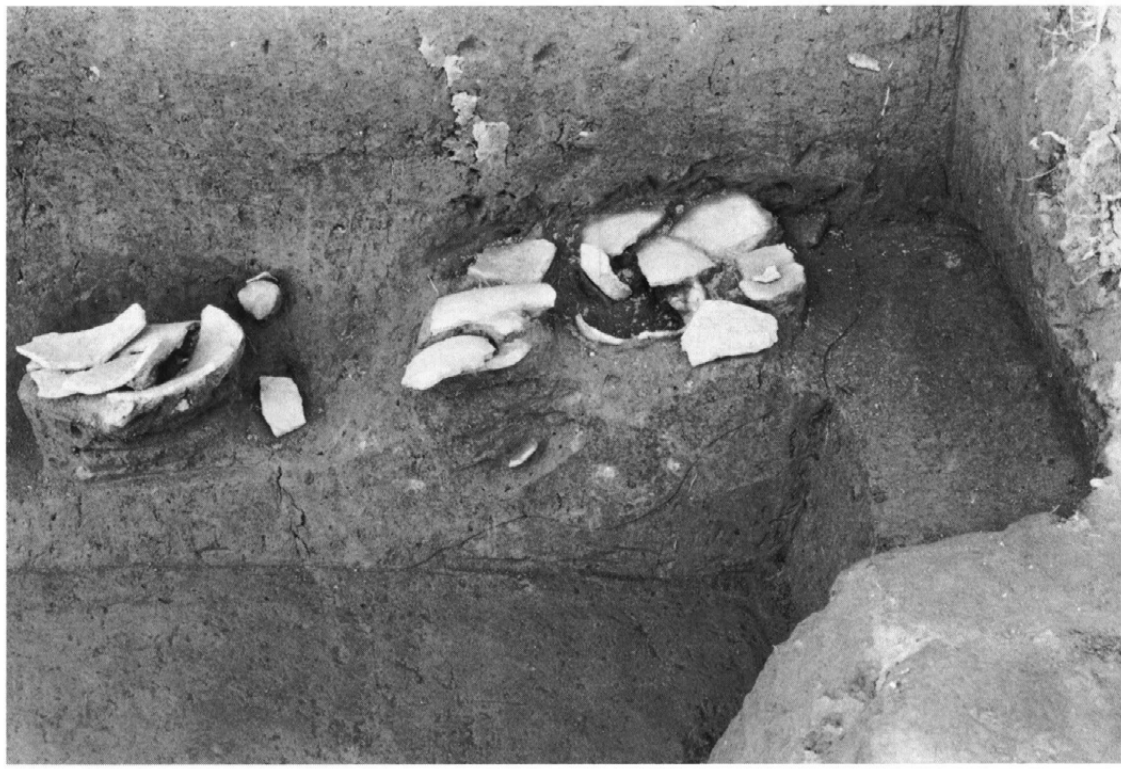
同・ピット３



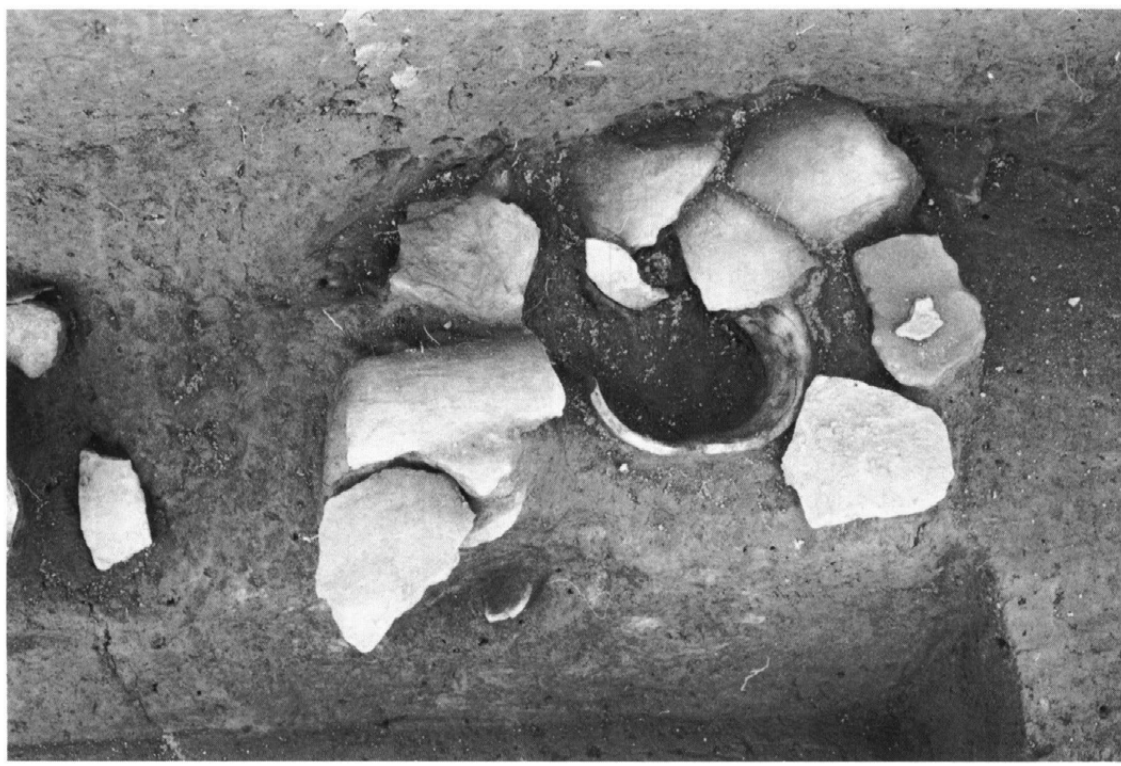
同・ピット４

第2号住居址（南から）　覆土は2層である。遺物は、ほとんどが覆土中から出土しており、床面からの遺物は少ない。

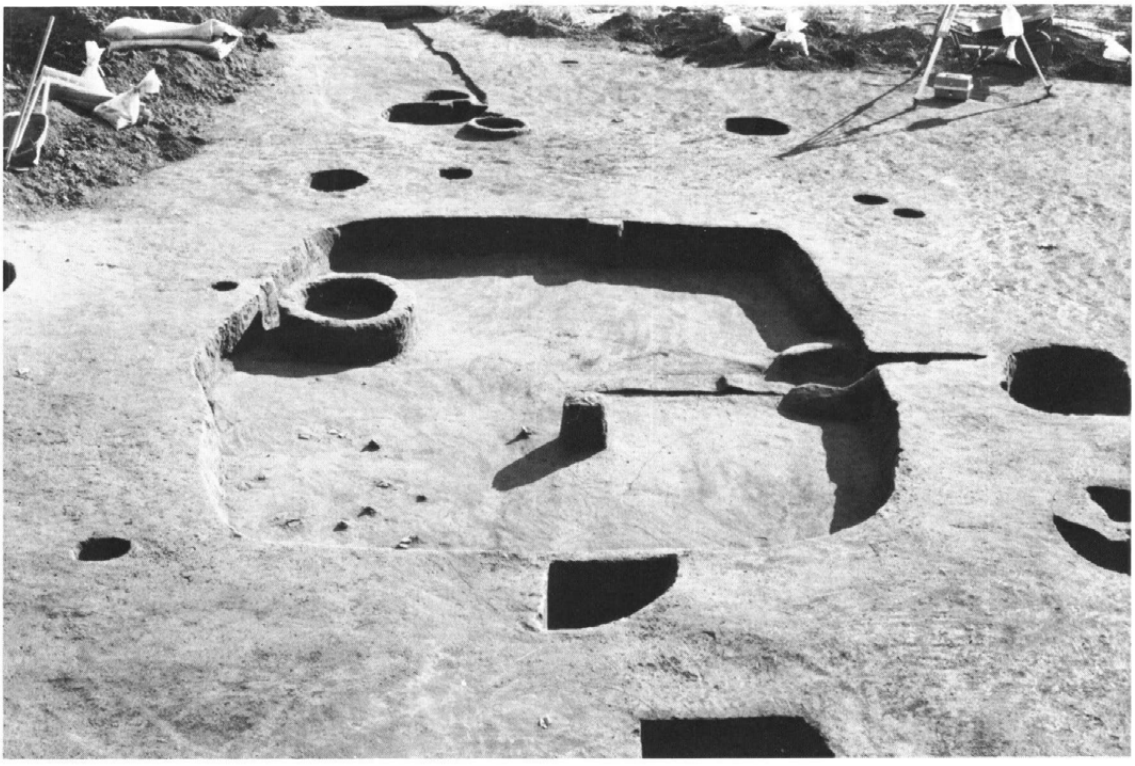
第2号住居址（南から）



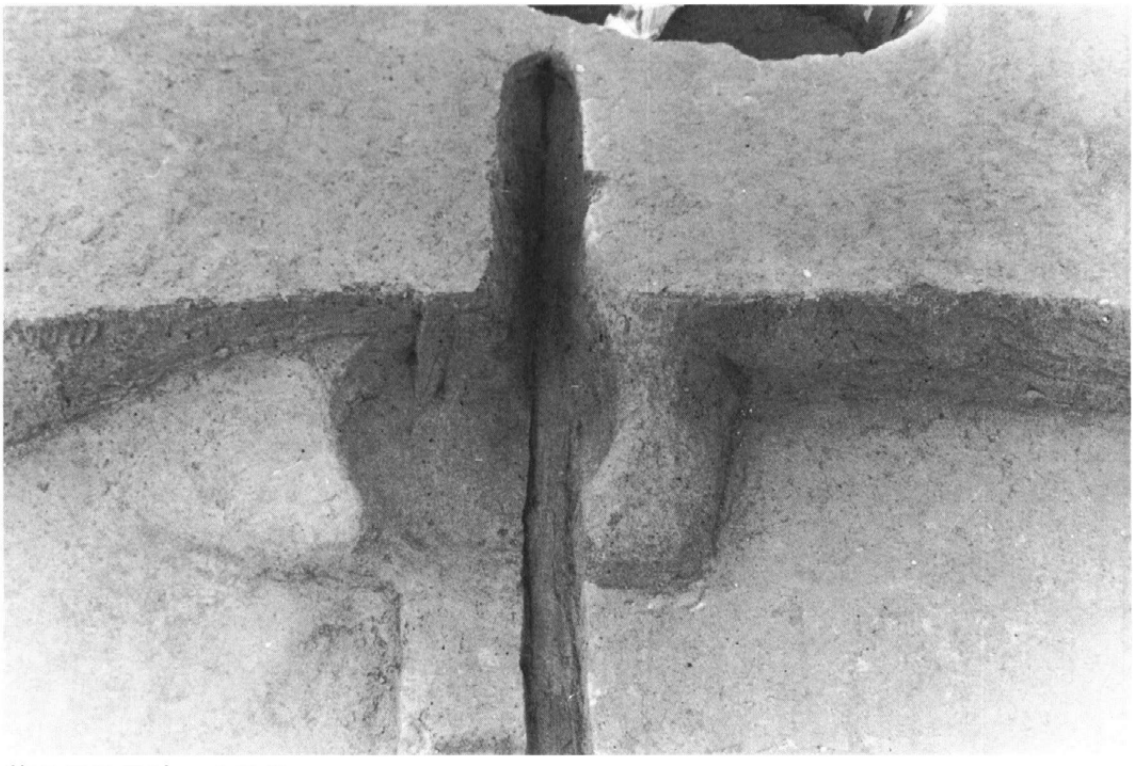
第2号住居址・出土状況　カマドに近く、壁は2段に掘り込まれている。甕は2個体分が出土している（5・6）。



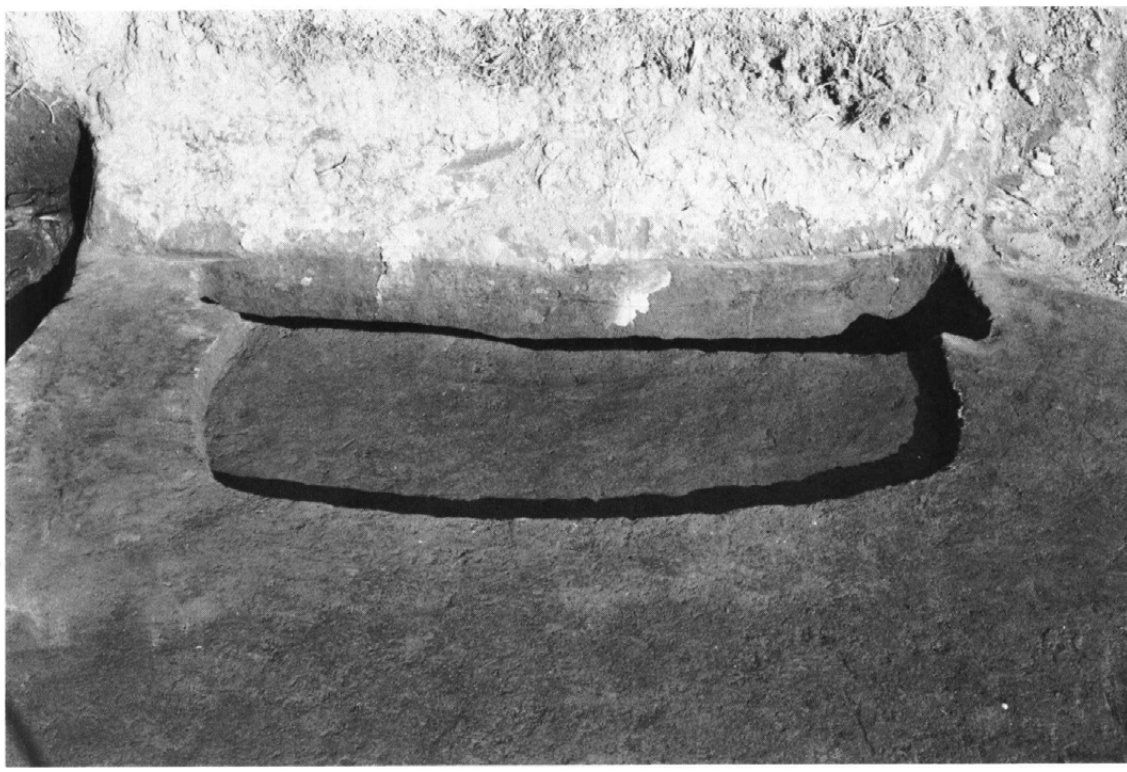
同（拡大）



第3号住居址（北から）　遺物は住居址の床面から土師器が少量出土している。



第3号住居址・カマド



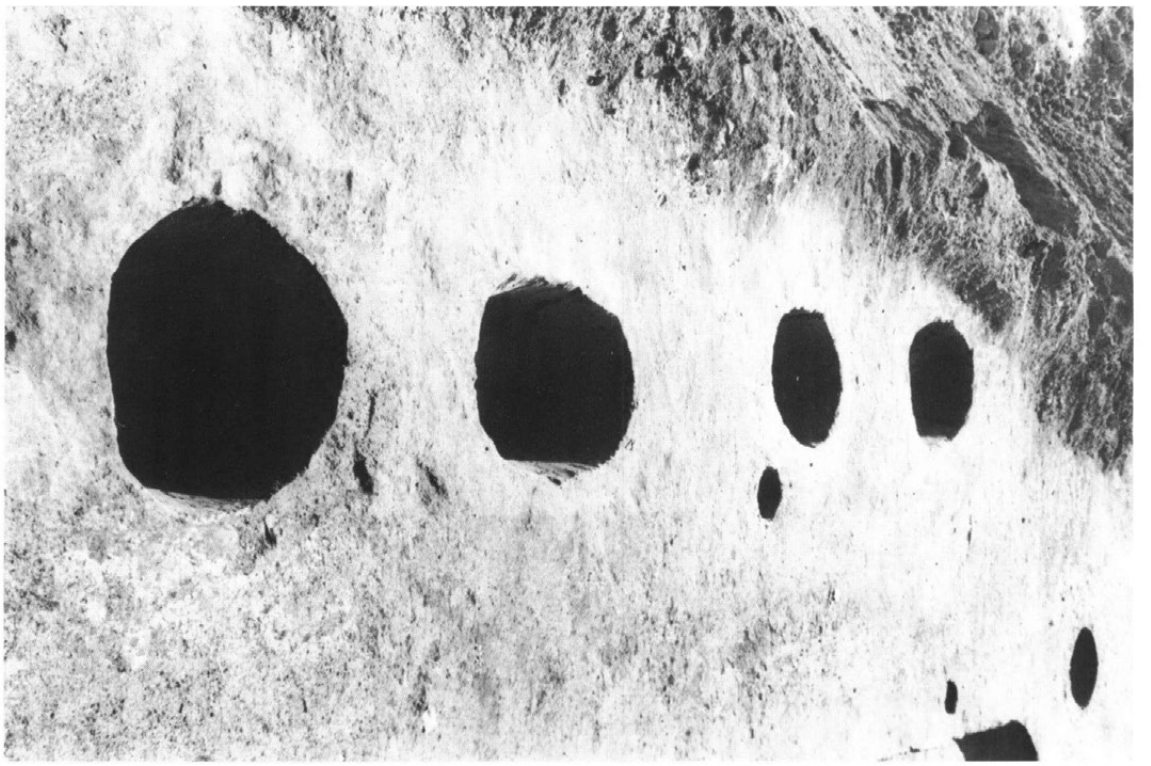
竪穴状遺構1（南から）

竪穴状遺構2（南から）　覆土は単層で、直下には鉄分の集積がみられ、床面との境界は明瞭である。

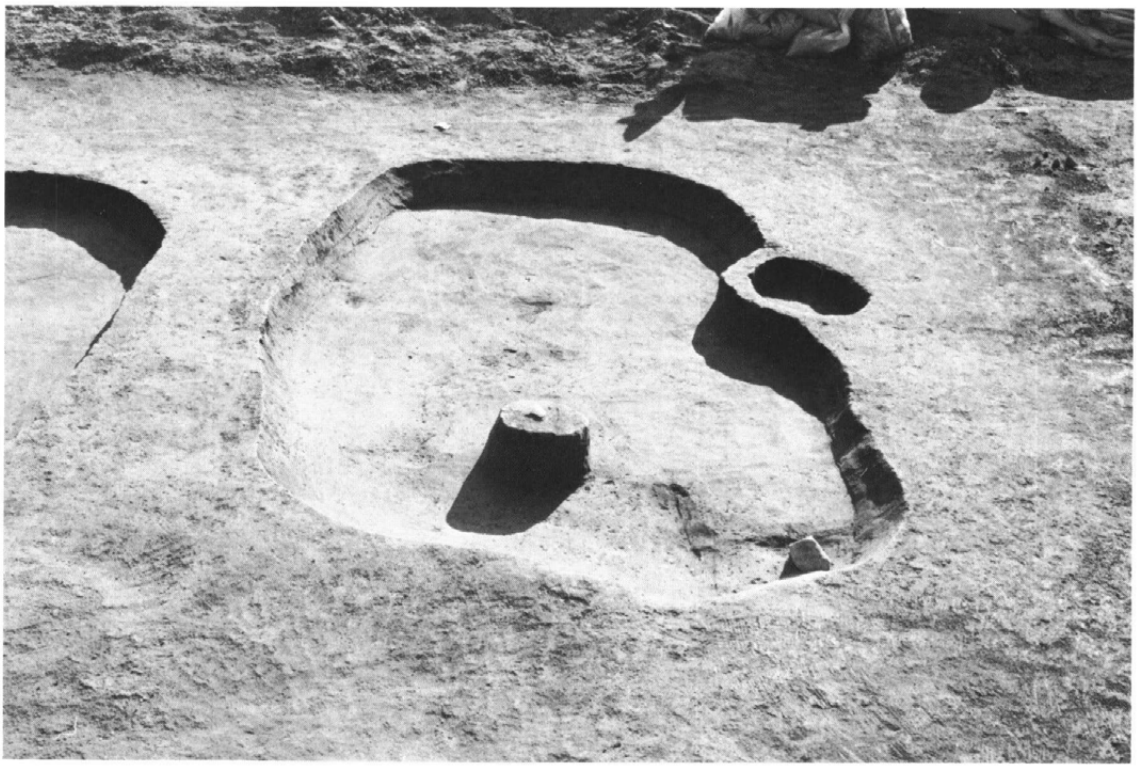
建物址 1（西から）　手前は、竪穴状遺構 3 、右上方は、第 3 号住居址、後方には建物址 2 がみえる。

同（北から）

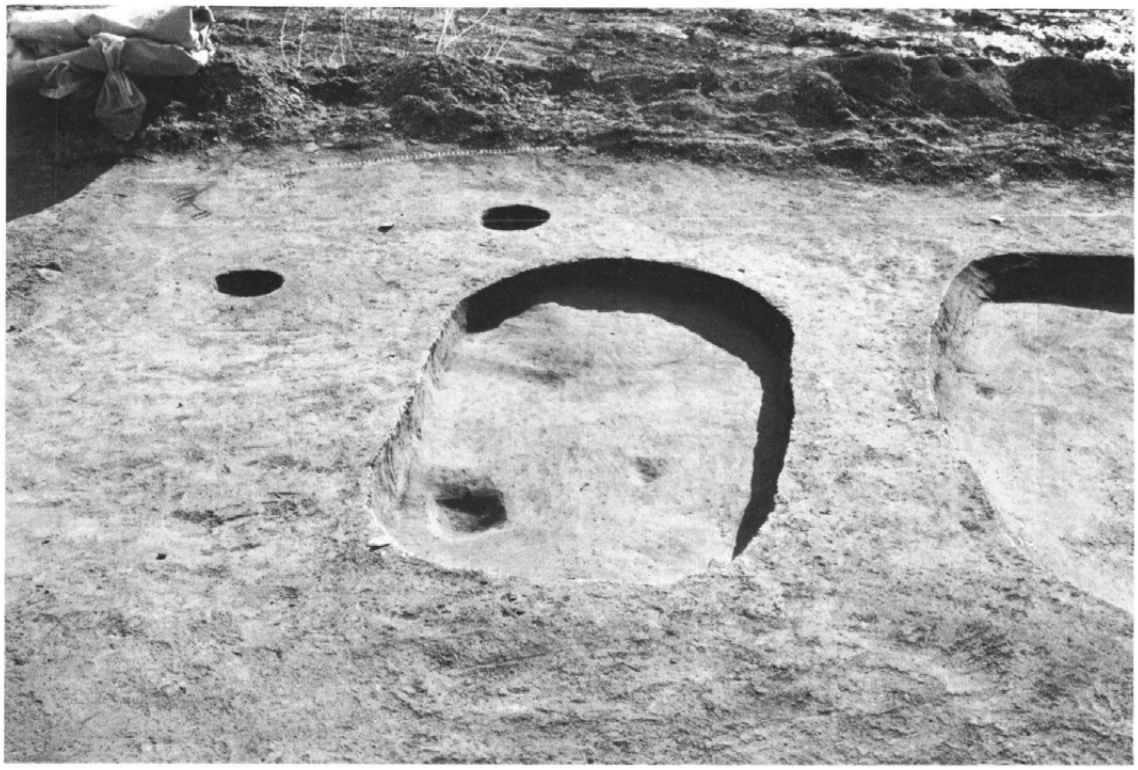
建物址1（P_{10}）　覆土は単層で、柱痕等は検出できなかった。下層の暗色土はV層で掘りすぎの部分である。



建物址2（北から）　調査区域の東端で検出された。調査できなかった。東側は以前に行われた削平

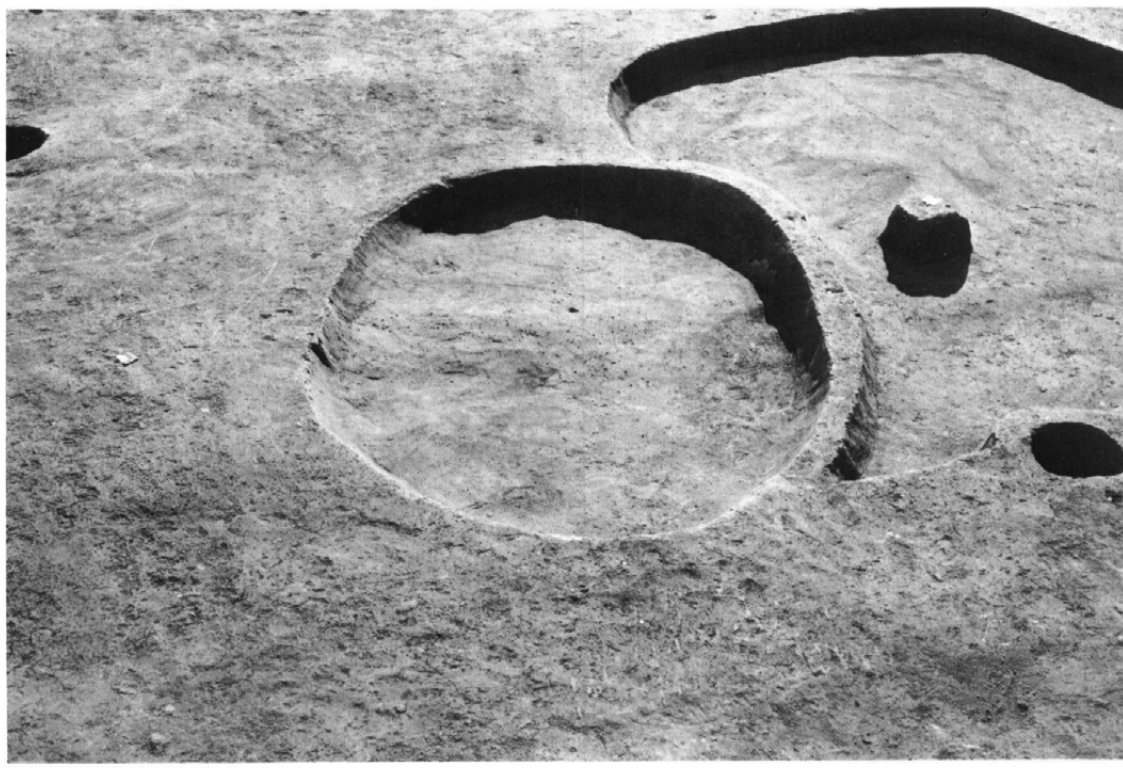


土壙2・ピット5（北から）



土壙3・ピット7（左）・ピット6（右）（北から）

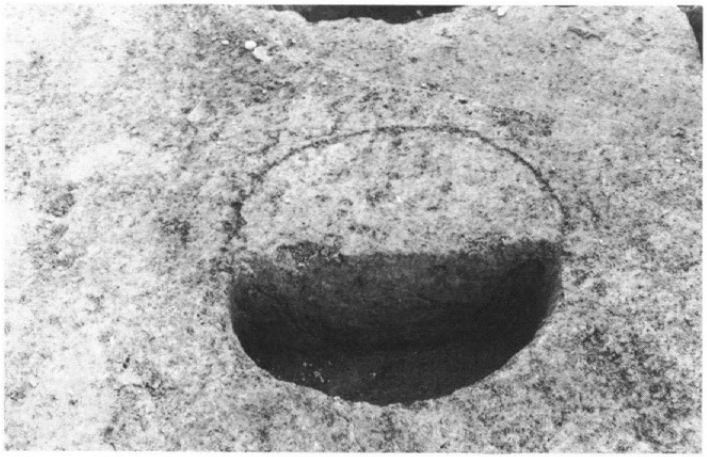
土壙4・ピット14（北から）



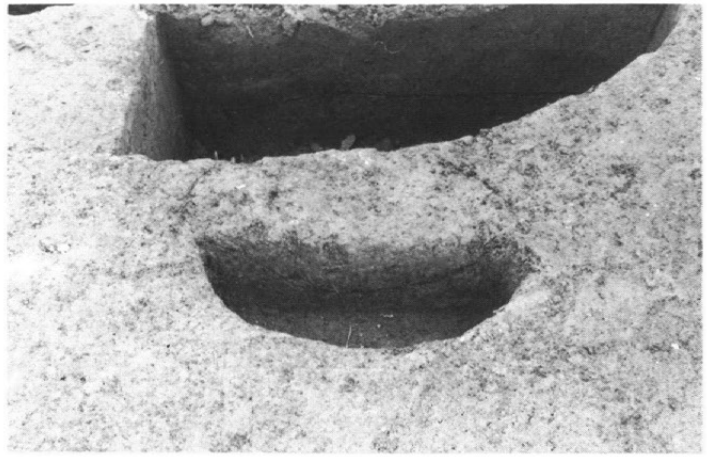
土壙5・土壙4・ピット14（北から）

ピット列（P_{35}～P_{40}）　大形の土壙は建物址1

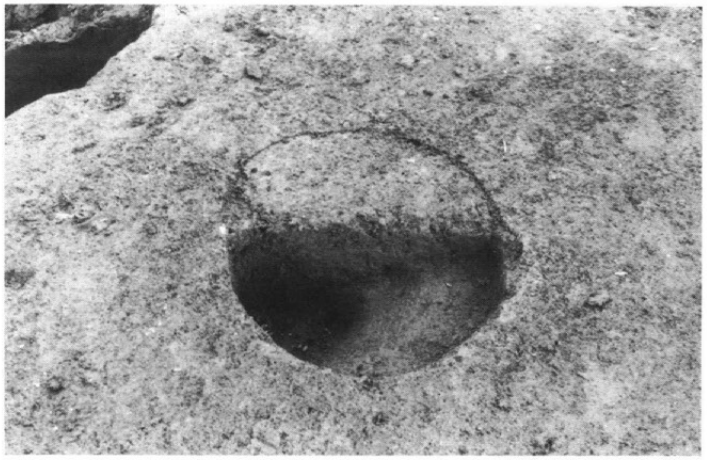
ピット列（P 32・33・35～40）・**ピット34・建物址1**　右上は竪穴状遺構3



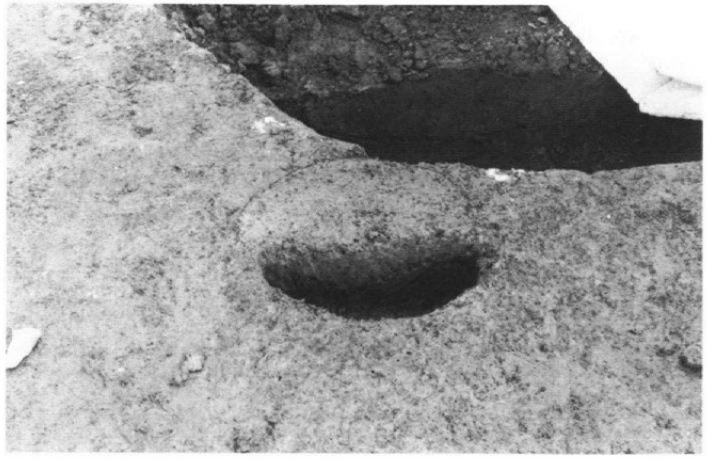
ピット列（P36）



同（P37）



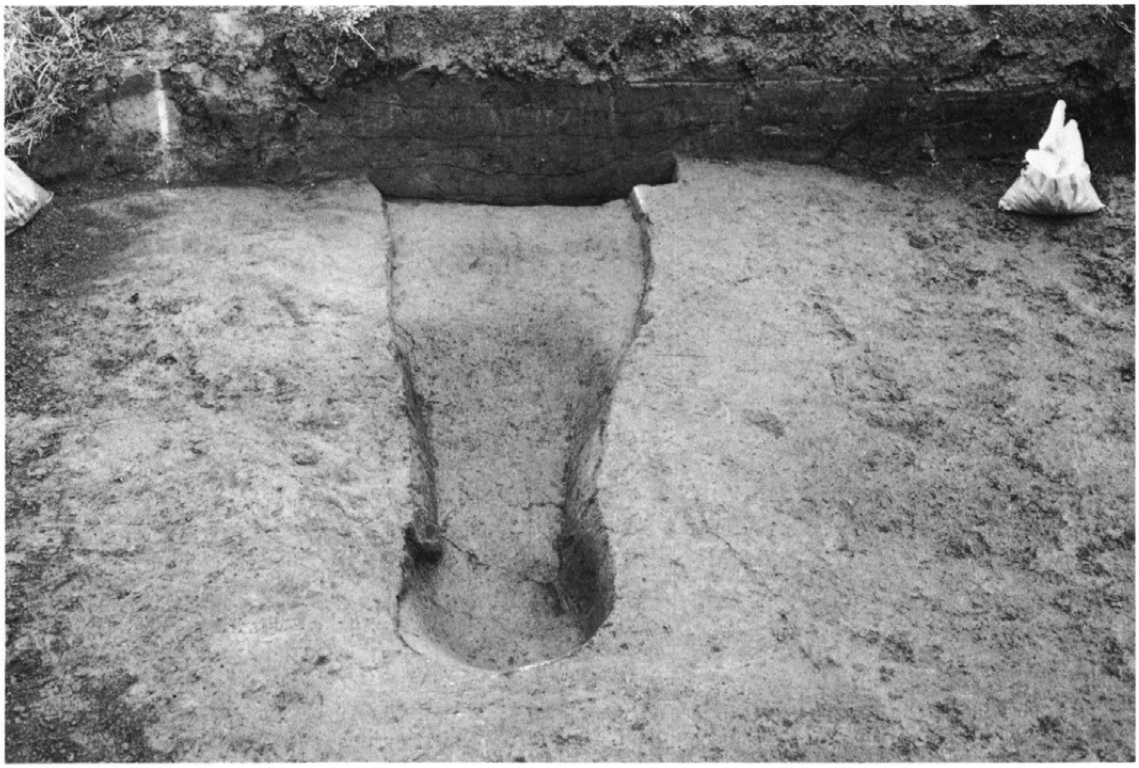
同（P38）



同（P39）

ピット列の覆土はすべて褐色土粒が混入する暗灰色土で、直下には鉄分の集積がみられる。

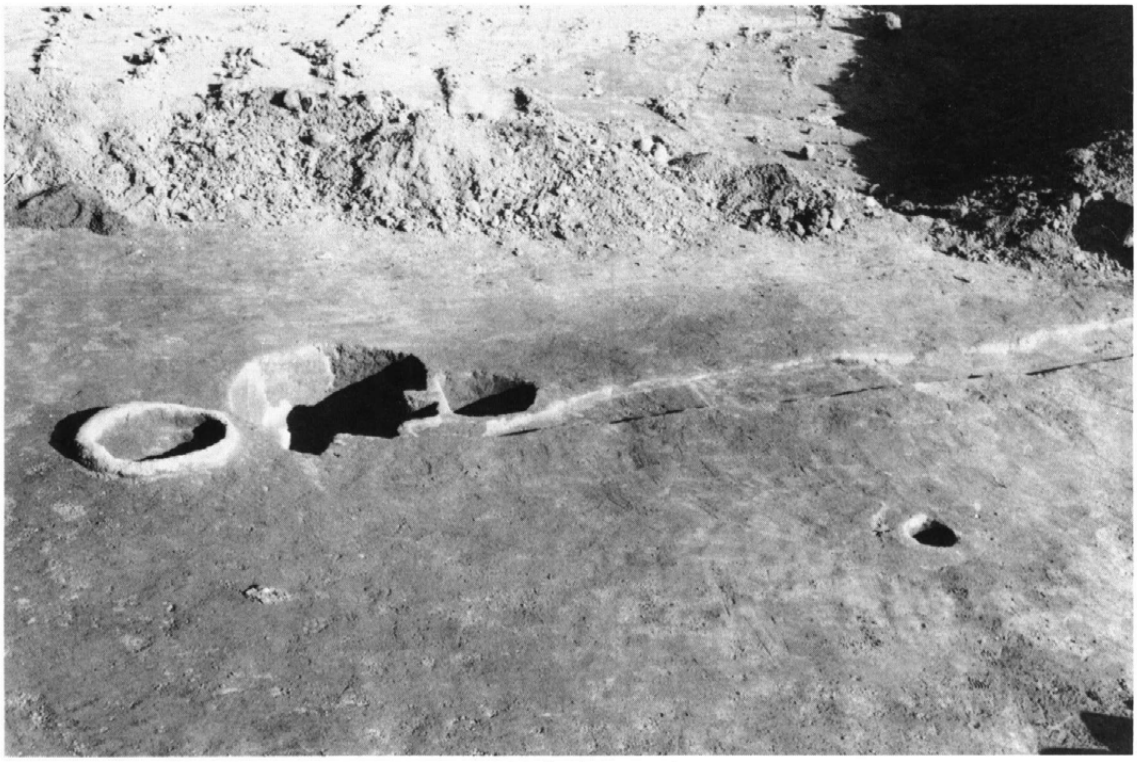
第15図版



溝1（東から）

溝2（南から）　溝2は第1号住居址，ピット3（左），ピット4（右）よりも古い。
溝底のレベルでは南から北へ流れている。

溝3（南から）　溝3は第2号住居址（中央奥），ピット8（左），ピット28（右）よりも古い。手前の土層には土壙7の掘り込みがみられる。

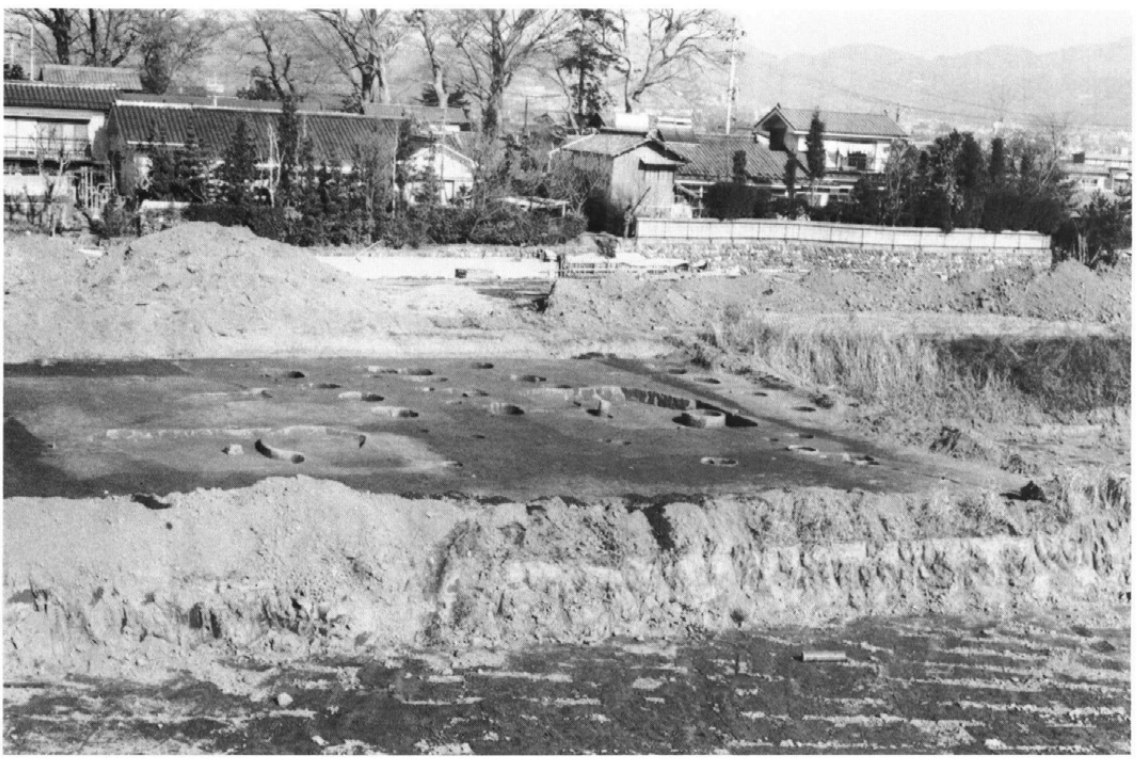


溝4・ピット21（左）**・22**（中）**・23**（右）（西から）

第1発掘面遠景（東から）　遠く島立小学校の校舎と新設グランドを望む。発掘区の両側・前面は土地が削平されている

第1発掘面（西部）　手前の一段低い面はⅨ層（第2発掘面）である。撮影後は第1発掘面を同じ高さまで掘り下げて調査を行った。

第1発掘面（西～中部）



第1発掘面（東部）　建物址1・2，第3号住居址などがみえる。

南西地区

北西地区

南東地区

北東地区（白い部分は自然流路及び礫のかぶりである）

第 2 発掘面

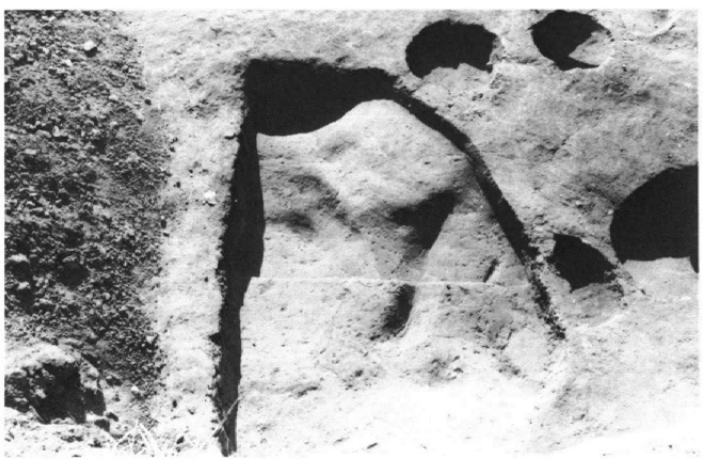
第20図版

北東地区　発掘区の壁面の下部には暗色土層（Ⅶ層）が観察される。第2発掘面は、Ⅶ・Ⅷ層直下の暗黄灰色土（Ⅸ層）が検出面になる。

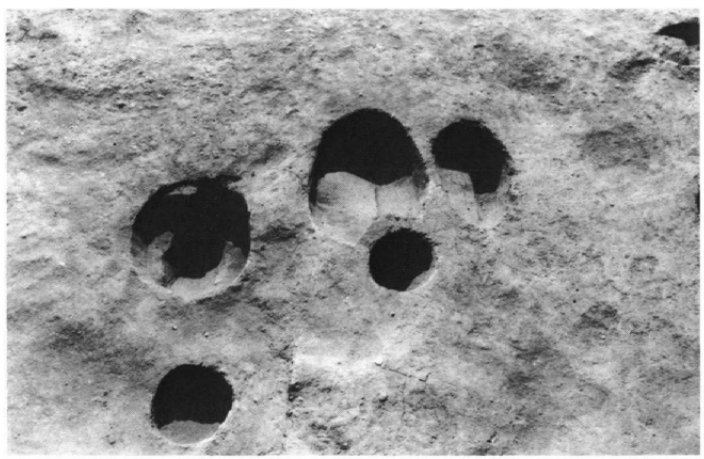
第2発掘面・土壙6・7周辺（東から）

第2発掘面・土壙2

同・土壙5周辺



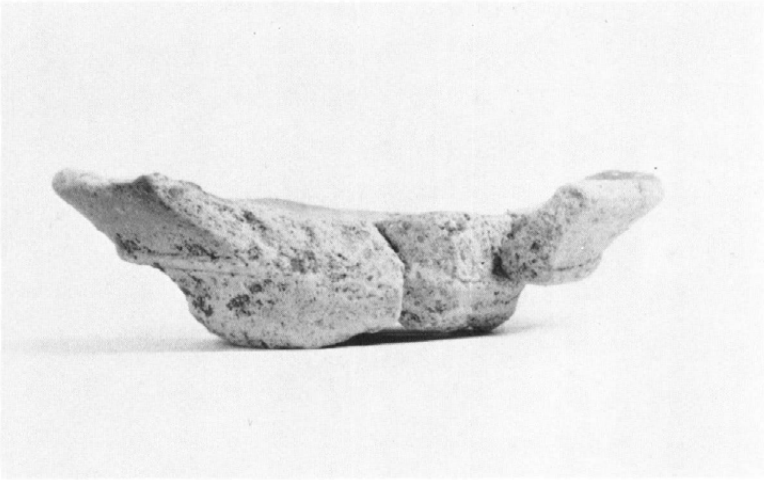
同・土壙6周辺



同・ピット68〜72

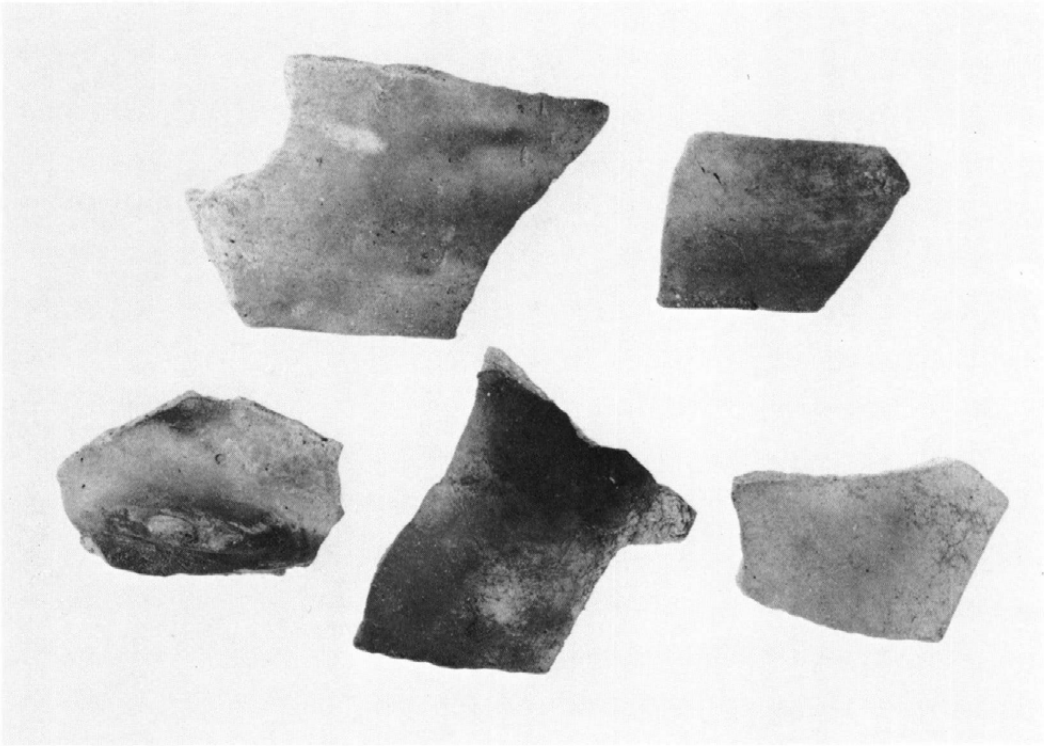
溝（トレンチ1）　発掘区の中央を西から東へ流れる溝の土層断面。
覆土はほとんどが砂礫である。

溝（トレンチ3）



第1号住居址(2)・高台をもつ皿

P_2の底面から出土している。
数字は図番号を示す。



同(3)・羽釜